

北の冬か 空の冬か 空の冬か 空の冬か
 身すか 身すか 身すか 身すか
 暮は 暮は 暮は 暮は
 拭 フフ
 雑巾 ガウキン
 の巾 かけ
 せ 驚
 せ 驚
 風邪 風邪
 行 行

兄さん 今年此冬は近年よない冷ささとおはあさんの
 言ってますあの、空へ入ってのら此朝晩のさむさぶ、おまじ
 みまあね。 内装材の山々を暮前よ降った雪のまだ残つて
 るまあ。

拭いたあと白くこぼりぬ冬の朝

雑巾の糸をいたあと白く雪箱のやうよこぼるのであつたり
 整ふと外ありませんね。 糸ととも晝よなると風さへなけ
 せはあたりのせ。

兄さん、東京のおくらりの様子は何でせぬ。 新聞で
 見ると、今東京よは悪い風邪の流行してぬるさう

注意 注意
 変 費
 作 務

てあつ。 健康よは充分注意して下さい。 家でもみ
 んなとんなのと大変心配して居ます。

空中足舞を伯父の許へ

高 鈴木 忠 重

空中足舞 寒中見舞
 北の冬 空の冬
 浸 漬
 せ せ

空へ入つてのら目立って冷ささの加はります。 いつもの年
 と少し今よりさむさはありません。 それでも朝はバケツの水
 の厚くこぼつて居ります。 漬物を洗ふ時など水の骨
 へくみるやうな氣のくまあ。 その上、家より高いところ
 よありまあので、空の風の戸のまきまのら肌をくまあ。

和歌 和歌
今年 今年
冬 冬
休 休

の か

本年 本年
冬 冬
多 多
内 内

元氣 元氣
働 働

こんな和歌の出まゝした。

今年はいつの年より 冬う怖い座ぬまぬぬ。 充分の氣を
つけてお身体を大切よいて下さい。 さよなら。

(1.20)

空中見舞をかねて近況を

高田山崎園廣

本年も去年よりも大変にあたりのくあめ 近ごろ二三日
のつきり冬となりまゝぬぬ。 お祖父さんお祖母さんは七
半の八時ころまでもねて居まぬ。 相変らぬ家内一同
とてし元氣未だ痛いて居りまぬ。

武もとほくと歩き初めまゝした。

朝は僕達のまた

又 かに
学校 学校
の市 かけ

は す

地 地
冬 冬
春 春
私 私

起きぬ中よ武ひとり起きて、冷いのを忘れて家中の中
を遊び廻つてぬまぬ。 僕達の学校へ出の節と後
を追つたりしてこまりまぬ。 もう口を少くさ、まぬ。 お祖
父さんの事を、おちーいとひっぱって呼びまぬ。 家の者
を誰ても知つてぬまぬ。

市地の冬さ如何であぬ。 茂坊も元氣でよいぬ。 冬さ
よ負節も比呂さま達者で市参り下さい。 私も冬さ
は決して負けぬつもりでぬ。 さよなら (1.20)

空中見舞
空中見舞

空中見舞

高田柴田貫三

多 望 多 望
會 反 變 標 多 望
會 ず 變 様 だ 望

今 朝
今 朝

今 朝 今 朝
思 思 今 朝
由 申 思
野 申 驚

行 行

標 標

拜啓 望氣のきびしい時期となりまゝぬ。
叔父様も相変らぬ御達者で 會社へおつとの事と
存じました。

今朝は今日朝の望気はきびしくして
一字のくまも不自由するのな

今朝の望気はひとほりの望気ではなかつたと思ひ由也。
学校へ来て先づ詰めるのは 望気にて一字一字のくまも
不自由ある事でも。道をゆく人もまるとなつてあま
こくと走つてゆく有様であ。

叔父様も今朝のこの望気い日は會社へお通ひよなるのは

困難困難
件 務
注意注意

本 本
本 本

思 思
思 思

暮 暮

在 在

紙 紙
紙 紙

さぞの困難なようね。 あ歳はとるこゝお身体の
弱いらす十人の注意して下さい。

望気よ負けないで本氣よなつて困苦よ堪えるのも。國
家のたの家のためだと思へば 望気よくらい平氣だと思
ひます。之れくもお身体を大切よ。叔母様も兄
さんもお達者でお暮り下さい。 さよならの
(119)

違約を謝す

高二前田鹿造

御手紙有のたく拝見致しませぬ。
丁寧な御手紙まで下さいますので、どんなことをしても

帝
行

此
其
後
今
度
都
行
度

紙
紙

福
福
思
思
婚
婚

と
と
傷
傷

行のな帝れはならなかつたので帝れと。とても急い
家の都合より依りつい失礼してしまひました。お許し
下さい。

此れ代り今後こそどんな都合をしても、必ず行く
つもりで居ります故、その前より一皮表のあそびよ来た
下さいませんか。

帝手紙より依りまると、君も達者との事、何よりの事だ
と嬉しく思ひまゝ。人間は達者の何よりの幸福
です。會員でも達者ならいんて。達者で一所懸心
命働けるなら、それこそ何よりの幸福だと思ひます。

會員さん何でもありません。人、後とも是非達者で
大いよ働いて下さい。僕たちも相長らあ元氣よく働
いて居りますから。

もう今年も昭和十年です。月日のたつのは早いもので
だね。お互ひに月日此歩みよ、員帝をよ進んで行かう
ちやありませんか。では帝手紙を大切に。さよなら。(4)

近況を報る

高田天野貞治

愈々空となり此のころは朝のつらさ、冬いてだね。

皆々様よは何のわらはりも無い事とは思つて居ります。

此
此
冬
朝
様
お

の
か
後
今
後
非
是
非
働
働
変
変
日
日
す
す
今
今
年
年
中
中
は
は
命
命
運
運
に
に
才
才
件
件
身
身
体
体

身無
此の風の
地
の
暮
雪
市
庭
今
様
本
思
方
内
事
風

如何であるの。

川端此水も氷結して冬風は頬をなで、人々も皆寒たい
空といふは、空をさななので、湯地の空気が格別と存じます。
空模様も何だか重々しい灰色の日ばかりついで、雪
も降りさうで心配です。また去年は雪は降った、雨も
とどきらないので、毎日庭かぬりつゝ、ふし、弟の着物を
よこして母上に叱られる有様です。本當は早とろも
消えあたるくなくて、災れ、はよいと思つておます。当方
家内一同、母事は善くして居ります。御安心下さい。
追々空さきびくく、なうまを故、風邪なと引のぬやう御用

致
送

空
中
之
舞

子
ま
の
時

冬
寒

心下さい。昔風の御幸福を、お新り致して居ります。

先づは直況お知らせまで

敬具

(5)

空中之舞より答へて

豊後田みつる

業了へて、おちむ手は持つ此の筆を

空よりとほを、うまのつりたさ

一日の仕事を止まされて、おちむ手は筆をとりまゝ。
空より吹き入って身よりみる風は、いつもより大分冷たく
感じます。

此の二三日は大分寒う御座います。それらも去年より

風邪風邪

様様

御座います
注意注意

私私

おな
大変

身身
足跡見舞

今年は大変悪い風邪の流行してゐるやうで御座るま

えの。叔母様此ところは皆さま御達者である。お伺

ひ申し上御座る。幼い赤ちゃんには充分御注意下さ

います。私方でも幸みな元氣である。殊に何時も元

弱な弟も大變心配して居ります。風邪一つは

の事元氣で居ります。御安心下さい。

では之れくも御身大切に。右御足跡まで

さよなら

(22)

寒中見舞

高一安田成行

能事時此初春
此の時の非常

冬景色
景色景色

御座います
御座います

私私
私私

能事時此初春。寒氣愈々相加はり、誠に凄きおたくな
つて参ります。此の

木のらうしよ小鳥も鳴きぬ晴れ空

小鳥のさみしやうは冬は鳴く冬の景色よつちもさみしく

空さの身よとほりまをね。

弟兄様一同如何お暮りである。姉上様も毎日日々

空さよ打ち勝つてお働きの事と思ひます。惠剛君も

第一君もともくに木のらうしよにも元氣な御座る

学の事である。我等一同御座ります。毎日元氣で

偏して居ります。

福 福

恒 才

層 尚 寒
層 尚
自 程
自 程
自 程
自 程

葉

然 然
大 大
大 大

土 産
情 情
私 程
私 程
私 程

是 北 是 非
當 方 當 方
度 度
家 内 家 内

冬 寒
標 標
標 標
標 標

葉

冬 寒

「幸福は働く者の上にある」といふ格言のあるやうに
唯一生懸命に働いて幸福のきつと得られるものといふ
て、猪のやうな真直よ、奮闘と努力のこつとを守つて
目的のつき進んで居りました。

これのゆゑへ入つて益々、心さのひととなりも、あつた。尚一層
自自の程を、おねのひ申し上申す。

幾ふのき文

高田園田二郎

拜啓 先日突然冬上はり候に、大度申厄介
に相成り申譯もこれなく候。尚又歸宅に際し

まゝは澤山なる申し土産物まで頂きあつて、申厚情の
程深之謝し奉り候。私七夕刻無事歸着致候間
何卒申休神下され候。

勉むるも近き中、是れと申す方へ申先未下され候
之鶴首して、家内一同待上候。

冬氣相加はり候折柄、比自々標、申自程の程祈り上候
先づは取りあへず、申し礼まで。 敬具

幾ふのき文

高田小林信雄

冬に入りさあさきひさ朝かな

此の季節
多
す

身体
い

病
症

明
い

す

働
働

冬
中
見
解

此の
閉口
都
會

此の
の

無
變

遊
よ

市
け

身
體

本
當

寒へ入って一年此中で最も寒い季節となりまゝ。寒中
はうつかり寒ると風邪なども引き易い時であらう十人九氣
を付けては、病氣などもいづれも下りて来。
224

寒中ももう後三四日であらう。いくら寒くても寒の明け
るとすつと凌ぎよくなると思ひまゝなので、お互ひも寒さよ負
荷を働きとほぐしたいものである。
こよなら

ては又

冬中見解と答へて親と友へ 高柴田幸二郎

拜復 早速の書見舞ありのたう。

全之比の四五日の寒さは、閉口してゐる。物價の高い都會
では無熟飯食ひの君故幸福でもあるまいね。僕等は
米代値段城案着る事もなく、田舎なるの故に平素と
何の妻とこころも無く、何のこころもなく今世間で正月休
暇を送つてゐる。毎日友達と歌留多取りやトランプ、雙六
等して遊んでゐると。

都會は「伊達の薄着」や「母達の言ふの」そんな員中情
けみのやうな事わいて、身体を大切にして呉れ。当地
も先日雪の先日降つたまゝ、また晴之切らないで本當
225

空中小見舞
寒中見舞

学校
おま
かに

や
と

比
此
の
寒

姉
様
の

後
す
變

市
け
す
學
校
學
校

無
す

そ
す

よ
よ

よ
に

注意
注意

此
様
の
様
の
様

此
の
様
の
様

空中小見舞

高一 小笠原定一

学校は急之子とものさむくこと

ふきさみよゆき今朝の二箱のな

木のらうはひうく吹き、寒氣は漸く加つて参りまゝだね。
此のころの寒さはとうでさ。右れ方も寒くなつたでせう。

おは梅もおち梅も姉梅も、おのほりありませんか。僕の
方もも変つた事はなくて家中よろこんで居りました。その
後、君は丈夫で通学の事と思ひましたの如何でさ。僕
は此の位の寒さは負弁ないつもりで、毎日学校へ通つ
て居ります。

今年はいつよきと暖い年で、隣の小文さんもお世さん

も今年のやうに暖いと、仕事をするにもよし、子とものあそび
もととてお守いれとであつたと、言つて居ります。

其の中は寒さもきびしくなること、思ひますを、故、十人の皆
注意下さい。

それでは皆梅様、皆健康をお祈り致しました。さよなら。

私の伯父さんへ

高一 高部 俊

氷はる今朝れさあさよ入営す

伯父さん、親類のK兄さんもいよく今日入営致すまゝよ。

のど びん
梅 ます

か ち
す かけ

冬 寒
あ ち
さ 立
美 花
梅 ます

よ
に

傷 び
車 見
川 端
あ け

しかせいつひうしのはありません。 それでも外は毎日寒い
のどが吹きまわつて居り梅が。

山の脊の雪もいまたよと帝あーして

寒のせよ咲く庭先の梅

空の中も梅も帝も春に先立つて珍しく雲を開いて
居り梅は。

一晩中休まずゆるく廻り居り

車よひのる氷なるのな

幾らの傷めて居つても車よ氷の光つて見えませ。 歯をみ
おいた後、川端の石の上よブラシを置帝は去るそれか
こぼりつき、桶の水などは押してもあつたやうよがっかり

ここはつてみるやうふ紅まてあ。

片地はこらりより暖いとは思ひませぬ。 あ祖父さんもお
祖母さんもお年寄りのおですのら、お身体を大切に
て下さい。 おねがひします。

先つた冬中御足許まで

さよなら (1.20)

おのき文

高見高孝二

起きるよし起きられざりき冬の朝

起きる 起きると父はとなれど

何よ〜てもこの頃の朝ね なの〜寝床のり離れられ

お朝
は朝

葉

冬 寒
あ ち
さ 立
美 花
梅 ます

傷 び
車 見
川 端
あ け

表座落御座居

冬に

市か

程

昨年

休

空申見舞

思

お

せん。一雄もいつもなのらびんくく居る事でもね。

二三日前からの寒さが多きひくとなりました。登校のみ

ちて手のかかひんでしまつて授業時^間中学の書帯ない

程です。冬は昨年よりきひくいやうです。

とうそ、体身体を大切よして下さい。二ちらとも一同そ

ろつて元氣です。

とようなら

空申見舞

高一園田二郎

拜啓 去る六日小寒に入り候へども 寒とも思へぬ

あは、のさよて 誠にお居り候ひくお昨日あたらより

空氣漸く相加はり候處 皆々様如何遊はされ居り候や

申候ひ申し上申候

勉君は此の寒さよも打勝つて日々市通学致され居

る事と 市安より申上候 尚又先日市安産たされ候

市子孫よは市紅健にてお育らの市平と存し居候此

如何候や 当地一同皆丈夫で働き居り珠子兄上

よは朝ほの暗きころより至つて元氣で紅車又勤の居候

その他申取もは、よりなら 小まも違者よて毎日通学

致し居り候間 市休神下されたく候

寒さ益々きひく相成り申取へ候へは皆々様いとく

休

同

教

区

至

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

同

教

区

探

休

姉様 大妻 都舎 北舎 好何 如何
 姉様 大妻 都舎 北舎 好何 如何
 遊部 朝行 居位 學校

都の姉へ

高一堀内富子

あ姉様 寒へ入って大妻寒う市座おまあね。都舎北
 舎を如何で市座居ますの。そくてお姉様よは何のおさ
 けうしありませんか。

田舎は大妻寒う市座居ますの。家中みな元氣で着い
 て居りまはるから市女心下さい。直ちやんね相度らあお
 はれ坊やで毎日そりを引張ってとく遊びまは。仙太郎さん
 は朝かほを洗ふのの。なのくおつあ〜とて川へ行つてし冷たい
 と言つて三十人か佐いやんで居ますの。朝飯をあまはと
 毎朝必ず三田大みちをそりよ来たつてのり學校へゆきまは。

私 私
 大妻 大妻 大妻 大妻
 遊部 朝行 居位 學校

かう言ふ私し元氣で友達と學校へ通つて居りまは。
 田舎は空いので日の市山よおまた凍山雪か残つて居り
 ます。私たちの毎朝通る機神橋の下は日蔭なので前
 前からの雪の積つて大妻あつてこほつて下駄で歩之時はわ
 ぶなで困ります。市井とし一方日向山は雪も少く消え
 てところく表雪の足えてゐる所もありません。
 とうお花もつほみを開きはくのま〜た。此の空ささの少
 しの間の市女後はあ〜と暖くなつて来るをせうね。私
 達も愈々第三学期に入りま〜るので益々勉強してよ。私
 果敢示うたいと思つて居りまは。お姉様も市女作を大切

乱 亂

横須賀 横須賀 姉

本日 今日 此 此 寒 寒 様 様

変 變 同 同

通 通 学 校 無 事 通 通

西 西 年 年

お祝ひの挨拶も。 先は乱筆ながらお祝ひの挨拶も。

七よな

(16)

横須賀よ住める姉へ

高田華都子

春 春とは言ひませぬもの、今日此のころの寒さ、ほんと
よ凌ぎ難う御座居ませぬ。姉上様はくわいさの節々様よ
はこの折の、お慶り御座ぬませぬの。お伺ひ申し
上帝御座。 お陰とまふで 私も愛するよ毎日学校
へ通つて居りませぬの、御安心下さい。
海の三峰の吹きあるを木のうららの日し、みぞれの

勢 勢

孫子 孫子 想像 想像

雪 雪 雪 雪 雪 雪

山 山 山 山 山 山

其 其

正月 正月 西 西 子 子

降る日も、何のそのといふ勢で元氣よ通 せいでぬる私
の孫子を 幸甚想像して下さい。 横須賀の方はこの
らより暖いさうでぬる。もう雪の降るまじうたせうか。
つい先日、こちらで初雪のそせは、津山降りま
した。長靴でもうまりさうた。なんていふ様でう。
又六日前に南陽氣の来て此の雪も大方消え去りま
したの。その代り今では毎日びうくと風はわり吹
いて居ませぬ。

鈴子も随分大きくあつたせうね。お正月はお待た
して居りませぬのよ。たいさうお出でませぬ

今朝 昨夜 風色 風景 景色 景色 景色 景色
 運動場 運動場 運動場 運動場 運動場 運動場 運動場 運動場
 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田
 核雪 積雪 積雪 積雪 積雪 積雪 積雪 積雪

さる位で也。

今朝の朝 昨夜大風の吹いたためのあたりの景色のとして
 も秋風景のやうに思はれま也。 学校へ来るとき、身よ
 々たるやうな寒風のほこを、のためて過ぎたり、火の無い教
 室の余計な寒さを思はせたりしてなうません。 それでも
 晝は少くぬた、のたぬるので、運動場のぬのつそとてもえ
 らいしので也。

あなたれお出てよなる 吉田の方も、富士山のたもとであ
 る高野山よ、こちらよりすつと寒さのひといでせうね。 それに
 先頃の雪は、それらでは六十糎以上も積つたさうで也のら、こ

気候 寒気 寒気 寒気 寒気 寒気 寒気 寒気
 身よ 身よ 身よ 身よ 身よ 身よ 身よ 身よ
 色々 色々 色々 色々 色々 色々 色々 色々
 伯父 伯父 伯父 伯父 伯父 伯父 伯父 伯父

あらとはのたう寒温もあつひ満ちね。

二斗のらしつと、〜寒い時の来た、とも、のまうません、のら。

お身よ、お身よ、お身よ、お身よ、お身よ、お身よ、お身よ、お身よ (20)

寒氣を思ひやうて 伯父の許へ
 高一 岩村甲さぬ

ひんきれて血の、しみ出る冬のあま。

寒い冬の訪れて参りまう。

伯父様も伯母様もなぐなれれて以来、色々御子様方の世話
 やら、お徳年の事やわ、おえらい事や、おあふし申上りまは。
 ぬみ子様も学校へお通ひれ事せうの。 寒さの、あつひの、い

身

さいませ。

又よならの

(1.19)

葉

幾ふのき文

高一渡辺みつ子

空の中見舞

空の中見舞中一上帝まを也。

中御見舞

空ひきひき折のら 紫松おのけりも市座おませんか。

皆様

正ちゃんも元氣で通学しておらつーやる事てせうね。

学

池の水ニけりつれたるその下よ

子

魚も動のぬさあま朝のな

おはり

家でもみんな空と戦つて居ますよ。妹も元氣あさる短

おはり

毎朝手を真赤よして飛ひ歩いて居ます。私も学校の

退席する

退席すると 炬燵と首つ引で也。

おはり

ひーくと木のらーは鳴る雑衣山

おはり

空とよは 我は立ちあそび

おはり

ては比の空とよお身体を大切よ。母のうしろとて申

おはり

して居るはいた。

又よなら (1.20)

空の中見舞

空の中見舞

高 佐藤ヨシ子

空の中見舞

道通る馬もし空とてふるへ

おはり

田舎のみちを行く馬子までののはあくと息吹きながら

おはり

ふるへる馬の手綱を首よのちかく。如何よし空とてふとこ

會

葉

強 働子私度標市の寒
強 働に私變標¹¹か寒

暮すり

はきつとお人書ひ出来る日しある事ぞせう。とよなら

(1.20)

幾かのき文

高一 天野菫久子

手も足もぶつ切るやうな寒さのな

追々寒さのは帯いとなつて参りませぬ。皆々標²は何のお度
りも清座のませぬの。お伺ひ申し上りませぬ。お方一同その
く元氣又働いく居りませぬ故清安心下さい。よき子とんこの寒
さきこらへて一心に清勉強でせうね。これの寒さの格別きひくな
ませぬの。清家内標元氣で お書い下さいませぬやうお祈り
いて居りませぬ。

とよなら (1.20)

初春の息吹



思會覽
思會覽

比此
是非

改改
改改

又年
に年

知和
知和

ささ
ささ
ささ
ささ

後後
後後
後後
後後

節和
節和

又見
又見

亮亮
亮亮

猫機
猫機

又
又

二時如
二時如

よりはすつと一／＼立派な展覧會よある事よ出来ると思ひます。

比ののとな春の二日間を散歩のつとりて思はれ々々お出の命下さい。お待たせして居ります。

皆様よしとてよ願う。

さよならの (2.25)

卒業よりわたり同室の友へ

高田渡辺みの友

遠い山々よの夜みのたなひいて春ぬきこの山里よし知やのな日さすのみちくして参り候ふ。

あゝ思へば早いこの年月ゆゆの如き八ヶ年の学校生活も

後輩のよなつてしまひ。私たられ學舎を去りゆ之日も

一日とせまつて参り候ふ。幾年こよあやさしいお兄

様方お姉様方をほたるの光の歌よ送つて来た私た

ちでせうか。そくて今ならの。皆さまとお別れし

な命はならなまうまう。

お別れで。のへりつると八年前此の月お母様よの

れられと死んで学校へ来たのでしたの。その時校庭

の桜のとい香を持来つて私たをむのへてくれました。

先生方も何し知らない私達を慈愛の満ちた父母

此如く或る時は姉の如く教へみちひいて下さいませ。

思 隨 此 則 展 見 身 會 務
 隨 此 則 展 見 身 會 務
 隨 此 則 展 見 身 會 務
 隨 此 則 展 見 身 會 務

多と思ひ満は。ペン習字も随人のうまいののありませ。此の外他の級とあなうやうは書方も圖畫も綴方も展覧してまは。のらとうやえんよ来て下さい。お待ちして居ります。では尚書中まで。さよなら。

のるた會へ友を誘ふ
 高岩村 繁

昭和十年六月をのるた會にて愉快な遊はうではありませぬ。弟さんたちも出来やうな。のるた遊ひをたさん致しませぬ。せひとも弟さんをお連れ下さい。大勢お出で下さるのをたのしみとお待たして居ります。三峠は雪をいたいて高く大空よ々びえて居ります。この忘れ難い故郷の山三峠の林で。のるた會をやるのであつたら。何となく痛快の事であり、そして又忘れぬ事の出来ないといふ思ふと。なる事とせう。

是 非 是 非
 是 非 是 非
 是 非 是 非
 是 非 是 非

昭和十年六月をのるた會にて愉快な遊はうではありませぬ。弟さんたちも出来やうな。のるた遊ひをたさん致しませぬ。せひとも弟さんをお連れ下さい。大勢お出で下さるのをたのしみとお待たして居ります。三峠は雪をいたいて高く大空よ々びえて居ります。この忘れ難い故郷の山三峠の林で。のるた會をやるのであつたら。何となく痛快の事であり、そして又忘れぬ事の出来ないといふ思ふと。なる事とせう。

友は新年の様子を伝ふ

高一 小笠原定一

侍手紙ありうたう。いはらく申返事差しし上帝なまてま
ことよをみません。 屯つうり お正月の氣人かよなつて居て
氣のゆるんで居たもので屯のら てつきり忘れて居りま
た。 そして今日父子注意されてはくめて氣配のついたや
うな仕末で屯。

今年のあた、うまはとうで屯。 このころは毎日小春日和
のあた、うまで屯。 お正月もこのやうに暖いものだから
正月の三日間僕等もあつたやトランプ。 えと、ほうび
等色々あつてらく遊んでよいお正月を過しはる。

新年の様子
新年の様子
新年の様子
新年の様子

注意

お正月
お正月
お正月
お正月

正月のあた、うまはとうで屯。 このころは毎日小春日和
のあた、うまで屯。 お正月もこのやうに暖いものだから
正月の三日間僕等もあつたやトランプ。 えと、ほうび
等色々あつてらく遊んでよいお正月を過しはる。

餅搗
餅搗

餅搗
餅搗

或時はあつたをうて負けてのほへ墨をぬられた事も
ありまね。 又餅搗の時 僕なんたの人のつとこゝろを
えて居るはうではおもしくもないので、母や兄の休んで
居る間についたとあれと、餅をつくの餅をつくの餅のか
分らないやうでうた。 母の高等ももなつて餅の一つ搗
やかないのかと言はれて、僕は言ふ事のないので手返し
をある人のないのらとうまい事を言つて屯まきまき。
そんなこんなで昭和十年此正月も過ぎまきまきの。 今思ふ三
学期に入つて、おの卒業もせまつて冬うまうたね。 後僅か
たと思ふと、うのくくしては居られないといふ氣持のしき

学校 學校
思 學

年 年
校 校

身 身
作 働

年 年
賀 賀

延 延
迎 迎
機 機
年 年

二度とこの学校へ入學出来ないかと思ふ也。とひいふもな
てこのの学校を卒業する事は嬉しい事だと思ひま
也。これからは十分 節身作は氣をつけて お働きた
さい。心からの御卒業をお祝ひ申し上帝また。

さよなら。

年 賀 状

高 渡 辺 み つ 子

謹んで新年のおめでとうの御申し上帝また。

叔母様は何時も御機嫌うるはしと。今年もさぞ
おしといお年をお迎へ遊ばした事と。又年なのにお

無 無
事 事
の の
お お
か か
け け
喜 喜
事 事
無 無
事 事
の の
お お
か か
け け
喜 喜
事 事

年 年
甫 甫
の の
は は
し の

明 明
け け
お お
の の
お お
の の
お お
の の

此の申し上帝また。私もおの御様で廿事十五歳の
正月さあめあーと。
未嘗ながら叔母様よ今年ものきりない御幸福と
御健康との真心まれおをやう。お祈り申し上帝ま
居りよあ。

かーと。い

年 甫 の こ と は

高 一 高 部 濱 子

明命まうてお免でたう。こゝろあまた。

皆々様子は至って御健康の中よ新しい年をおむのへ
遊ばされた事を お悦び申し上帝また。私乃でも

思 思
思 思
思 思
思 思

体 体

状 状

高 高
高 高
高 高
高 高

ことうとやうと思われたいです。

今日も氣持の悪い雨の降って、おこたよはかりもとつて
居たいやうな目で也。

お身汗をお大切にして下さいませ。 七よなら

年賀状

高 高部 茂子

阿部よりお返事お返し御座るませ。

昨年中と色々お世話様になりました。まことと肩籠り御座

おました。本年も何卒相成らぬおねのひをませ。文

七近は中にお邪魔致さやうな事を申して居りました

の、その時上琴子さんや高力さんとどうぞおそびよあそ
びして下さいませ。

望し山も雪で埋められ何となく氣もわの晴々として来

ました。冬の空は燦と輝く日の丸のみ旗を上げてさへ

心おあたりなつ新しき年と也。此のさまの御幸福をお祈り

しく居りました。

年頭の祝辞

高 文竹 本江

あけましておめでとう御座居ませ。

皆様 お元氣でお正月をおむらへられた事で御座るませ

座 座
座 座
座 座
座 座

松竹は輝かしい
初日を反映し
ます 萬歳の
聲 羽子の音の
中から御壽
を申上げます

なごやがて朗ら
かな新年は前
れましたやっ
ぱりおめでた
うの言葉はふ
さわしう御慶
いますね 御壽
を申上げます

松竹は輝かしい初日を反
映し、萬歳の聲、
羽子の音の中からは、
おめでたうの言葉を
申上げます。

なごやがて朗らかな新年は
前れましたやっぱりおめで
たうの言葉はふさわしう御
慶いますね 御壽を申上げ
ます

手紙の常識

序

農村用高等小学読本巻四 第十三課 「手紙の認め方」の劈頭第一に、
「手紙を認めるのは人と應對するのと同じこととて、先方の如何に依つて程
程の言葉遣に注意せねばならぬ」と述べ、最後に「手紙を認めるのは決して
私づかしい事ではない。人と對話するのと同じ心持で書けばよいのである。
」と語んで、手紙認め方の要領を説明してゐる。

其の中には、「手紙は其の目的や場合に依つて精粗繁簡の趣を異にするべ
きであるとか、手紙は近況報告や相手の不幸を慰めたりする場合以外は
普通簡潔である方がよいとか、充分の誠意と同情を以て書くべきである
とか或は又、要領を明瞭に記し、返信は早く認むべきである等と大方の

注意事項を丁寧に教へて、これだけ知ったばかりでも之をよく守りさへす
れば、日常の手紙を書くのに事欠きはしなれと思ふが、私はもう少しこれ
をかみ砕いて自分が手紙に関する本を読んだ範圍内の狭い知識で卑見を
述べたいと思ふ。

手紙の効用

文化のまた進まない時代には人の心ものんびりしてゐて自分の消息、他
人の消息、見舞、商用等皆互ひに會見して話してゐたが、今日のやうに總
てが忙しく餘裕の無いどら辛い世になつては、少し位の用事で一人々を
訪問してゐるやうな衣氣な事はとても許されなくなつて來た。そこで手
紙や葉書で用事を足すといふ習慣が愈々急になつて來たのである。
費用や時間や其の他色々の關係から、私達は遠方の人と會つて話る事を
許されない場合が非常に多い。そんな時自己の思想を傳へ相手の事を知

る事の出来る最も容易な最も簡單な方法は手紙に依る方法だらう。
手紙ではものが間違ふとか失礼であるとか言ふ人もあるが、これは大
きな考へちがひで、口で言つた事には間違ひも起るが書いたものでは間
違ひが出来さうな筈が無い。訴訟事も口で言つた事は一切採用されない
が、書いたものは確かな證據となつて役立つものである。又少し位の用
事での訪問や忙しい時の訪問など、却つて迷惑をかけ礼を失ふ事になり
ほしないだらうか。
唯手紙では思ふ事がはつきり書き表はせない懺悔や、書き方を知らなが
つた爲に相手に對して礼を失ふといふ事はあるが、其の欠点を改めるに
は修練する事が大切である。
綺麗な文字で書かれた行き届いた手紙を見ると、また見ぬ手紙のまを
きつと教養のある方らしい方だらうと誰しも想像するにちがひない。私の
日常生活で入なる楽しみの一つは人から來る手紙を読む事である。私は
其の日に來た封筒を手にとつて、鉄で其の封を今將に開かうとする時、
まだ見ぬ寶庫の扉を開くやうなときめきを感ずる。それは丁度新しい本

を求めて其の第一頁を開く喜びや。石油のかほりた、よふ折目正しい光の日の新聞を繰りかろける時のよろこびかと似てゐる。而も場合に依つてはそれ以上のよろこびでもある。久瀧の友から清をこめた手紙を送られて、むかしながらの友情が湧々と湧き上ったりする事も決して珍しい事ではない。

其の外唯一本の手紙で思ひがけない出世をしたとか、就職の幸運を掴んだとかいふ話も澤山ある。手紙の上手下手に依つて他人に好意を持たれたり、信用を受けたり、輕蔑されたり嫌はれたりする事のあるのを思ふと、誰しも上手な手紙を書きたいと思ふにちかひない。上手な手紙を書く幾には文字の練習も必要でせうし、文章の研究も大切でせうか。それ以上に肝要な事は自己の心の修養です。

禮と敬の心の修養

「文は人なり」といふ。心の波動が文字で表現される事は事實であり、文章に依つて人格を判断される事は尠くない。源が清くなければ下流も清からう筈が無いと全様。心が清くなくて立派な手紙は書けるものではない。心柄といふものはほんのちよつとした言葉の端にも表れるものである。

斯ういふ話がある。或る時三人の親しい男が仲よく語つてゐる時、其の象の女中がバナ、を盆にのせて持つて来た。第一の男が、「はあ、い、な」と言った。第二の男は、「駄目ぢやないか、着くぞ」と言ひ、第三の男は「全く小笠原のバナ、は値はかり高くてね」と言った。第一の男は畫家で色を見た。第二の男は商人で味を考へた。第三の男も商人で値を考へた。三人の中誰の心が一番尊いだらうか。(北原白秋「沈心雜話より」)

もう一つこんな話がある。北原白秋氏の所へ、歌を見て受れと言つて来た男がある。白秋氏は其の男と二人で話しながら散歩に出たが、或る小川まで来た時其の川岸の水楊に燕が止つてゐるのを見て其の男が小石を投じた。白秋氏は其の一事で其の男の心を見抜き、こんな心柄の人には

歌はよめぬと思つて遂に其のまゝ別れてしまつたといふ。それは唯歌だけではない。心が出来なければ手紙文も書けないのである。大町桂月氏は「文才が無くても浮世の経験をつみ世間の色々の事に長じ、常識に通ずれば手紙文は上手に書ける。」と言つて居る。して見る

と結極修養を積まなければならぬといふ事になる。その心の修養とは凡てのものを愛し敬する事であり、従つて礼を身する事である。手紙は人と會話すると同じものである故、其の纏りで認めるべきである。或る人が電話口で先方からの電話をさくのに、正しく礼をしてから受話機を耳にあてたといふ話をキングで読んだ事があるが、手紙を書くにも其の位の心がけがなければならぬ。

言葉遣

禮の表れとして先方の人達に對して「貴、御、尊、賢、令、様、等」の

語を添へて 貴殿 御一家 皆々様 御一統様 御尊父様 賢兄 御令兄様と敬ひ 自己の事は拙者 小生 愚生 僕 豚児(自分の子) 刺身(自分の意) わらは等と卑下してゐる。

そして之を手紙文中に書く場合も先方への敬語としての「御」の字や、先方の人達の名前等決して行の最下に置かず、又自分方を表はす文字は行の最上端に置かぬは勿論であるが、一段小さく論へ片寄せて書く位にしたいものである。

敬語の用ひ方は大變むづかしい事であり、それだけに又注意せねばならない大事な事であるが誤つて自分方の方へ敬語を使つたりする。變なものになつてしまふ。といつて相手に敬意を表する余り「愚父がといふやうな言ひ方はまづいと思ふ。父がといへばよいだらう。又自分が書く返事に「御」の字をつける事はあつと考へると間違ひのやうにもとれるが、直接にか間接にか相手に關係を及ぼす時は「御返事」とすべきで、單に「返事」では却つて失礼にあたる。但し「御送付」といふ言葉はその意味からいふと正しいが、「付は上から下へ物を授けるといふ意味の字で、御送付下

さしとは使つても、「御送付申上げます」とは言ふべきでなく、「御送り申上げます」といふやうにせねばならぬ。

人を見て法を説け

「人を見て法を説け」これは手紙文でも當然守らねばならぬ教へである。三十歳四十歳位の人々には書翰箋の細い罫へペンでこまかに書いてもよいが、六十歳七十歳の老人違へは毛筆で巻紙へ書くのがよい。若し止むを得ずペンで書くなら用箋二行分位に踏つて大きく太く書くがよい。勿論文も先方の趣味や性質に合ふやうに書ければ尚更よい。淡泊な人へは簡単に、歌俳諧を好む相手には歌や俳諧を挿入するのもおもしろい。文体も相手次第で候文体でも口語体でも自由に使へればよいが、然し候文体は早晩必ず影をかきぬるものである故に、思ふまゝにすゝく書き流して少しも作りかさねぬ態度を尊ぶ今日、矢張り口で言ふ通りに書け

はそれが最もよい事だと思ふ。字引を引かなければ分らぬ字を使つたり、英語や獨逸語を挿入したりするのは、唯失礼であるばかりでなく、我國民として注意せねばならぬ事である。又先方に依つて余り崩した字即ち単体で書いたりする事も失礼である。要するに先方の人を愛し敬して、最もよき書体と言葉遣と文体とで書き送るやう努力練習する事が大切である。



(目上)

申上げ奉り候
成し下されたく
遊ばされたく
仰せ越され候儀
下さいます(せ)
存じます
申上げます
ございます

(同輩)

申上げ候
下されたく
成されたく
御申越の儀
下さい
思ひます
申します
あります(です)

(目下)

申し候
下さるべく
成さるべく
申出の儀
下さい
思ひます
申します
あります(です)

封書か葉書か

封書が鄭重で葉書は略式である。目上の人と改った場合は勿論の事であるが、其の他の場合でもなるべくなら封書の方がよろしい。然し急

ぎの用、簡單でも濟む場合、目下へのたより等は葉書でも差支ない。多忙のためゆつくり手紙も書いて居られない時等は、其の首を断つて取敢へず葉書で挨拶をしておくべきだらう。「葉書一枚よこさない」と非難されることも珍しくない。葉書でも礼を失はぬやう凡てに注意してさへ書けば、つまらない封書よりどの位喜ばれるか分らない。要するに人を感動せしめて其の目的を達するやうなうまい味のある手紙を書きたいものである。その為には手紙に對する大体の心得を知つてゐて之を守りやうに心掛けなければならぬ。

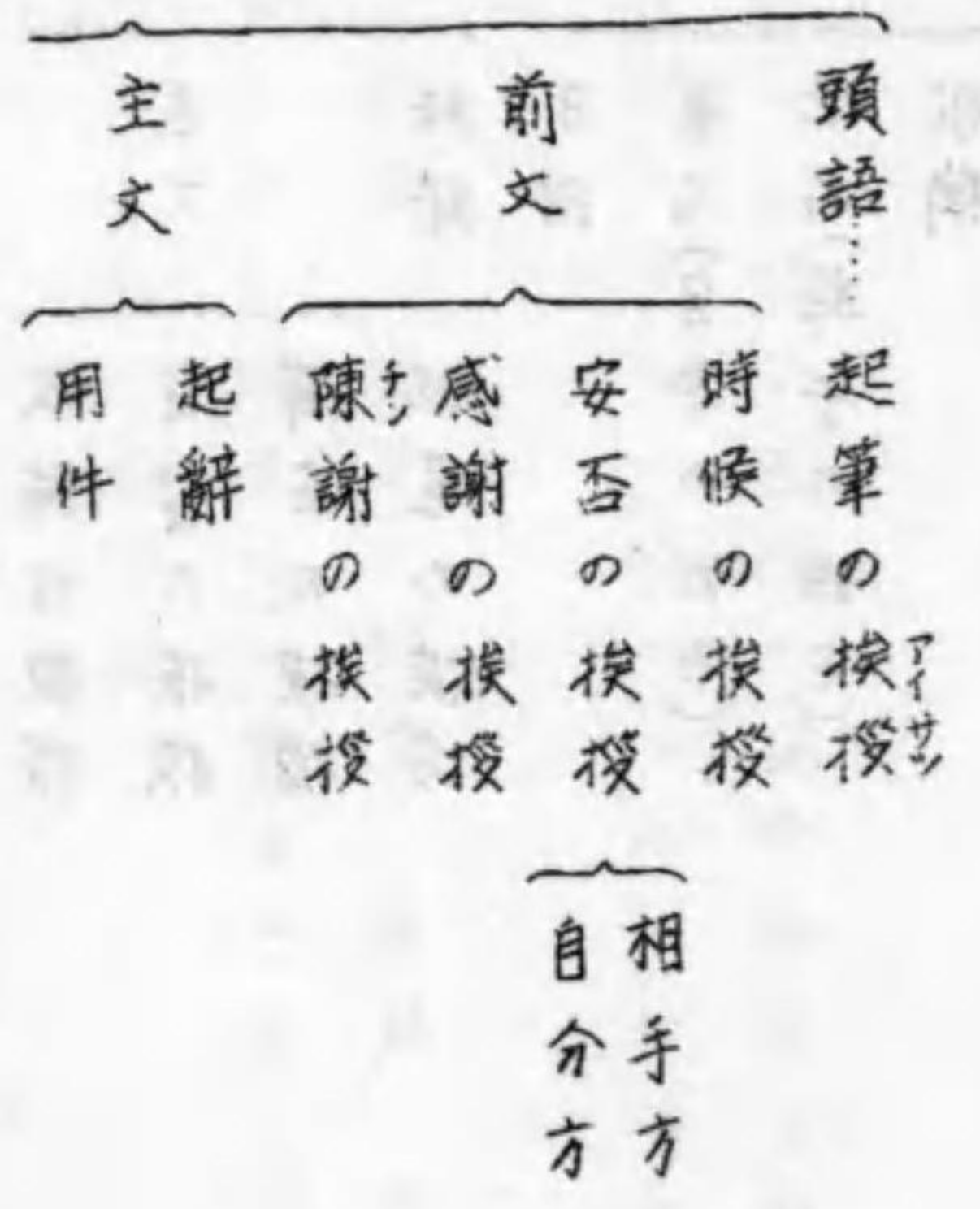
手紙心得十五ヶ條

一、ありのまま、を正しく書くこと。氣取つたり嘘を書かうとすると必ず筆が違まない

二用の手紙は即座に読めること。時機をおくらしした手紙は失礼であり、
 従に立たぬ。
 三返事は折返し出すこと。時機を失ふと自己の怠慢を廣告するやうなも
 のである。
 四親しみの情と親切と謙遜と。此の三つを忘れぬこと。
 五感情の激してゐる時は筆をとらぬこと。心の静まるのを待つてから書
 かないと十中八九までは必ず失敗する。
 六文章は達意意味が先方へよくとゞくを主とし、多少は文飾をほどこす
 やうに心掛けること。
 七文字は明瞭を第一としまづくとも真面目に認めること。
 八書式は正しく封筒や用紙の取扱上の作法を守ること。
 九必ず自分で書くこと。多忙の時や病氣の時や代筆にても止むなし。
 十手紙のけいこの為自ら進んで代筆をすること。
 十一封筒や用紙は余り粗末なものを避け、自分用のものは成るべく一定して
 おくこと。

十一書き終つたならば必ず一度は読み返すこと。
 十二なるべく後から書入れをしないこと。
 十三日附や住所は必ず正確に記入すること。
 十四貰つた手紙はなるべく紙で開封すること。

手紙文の組立



收結の挨拶
 自愛の挨拶
 傳言の挨拶
 結語…結尾の挨拶

後附
 署名(自分の姓名)
 宛名(相手の姓名)
 敬稱
 脇附

添文
 副文 追て書
 別紙 封入物

手紙文の組立は大體右の如くであるが、必ずしも此の形で書かねはな
 らぬといふものではない。時に依り相手に依つて此の型を破つてもよい
 が、此の形を知らないで破るのは出鱈目であつて、充分手紙文の形式を

知つて居つてその場合々々によつて通じた破り方をすることはよい。急用の
 手紙に時候の挨拶を省いたり、簡しい友人への手紙で時候の挨拶を文の
 終へ残つて行つたりするのは甚の一利である。
 今から各部の一例／＼に説明を述べて行きたい。

頭語

冒頭語とも言ひ面談の場合會つて敬礼する代りの言葉である。頭語の
 下は一行あけるか一字か二字あけるのが普通である。

普通の場合、
 拜啓 謹啓 拜呈 謹呈 肅啓 恭啓 啓上 謹みて申上候(ます)
 一筆啓上はり候(ます) 昔甲を以て申上候(ます) お母様 ○○先生
 おなつかしき○○子様
 初信の場合

永だお目にか、うす火札ですが一書並上げます。突然ながら卑簡拜呈
仕り候(もす) 永だお目の氣を得ず候へとも一書拜呈致し候。

前略の場合

前略 冠答 二返 略呈 前文御覽下され度候(前文御覽下さい)

急信の場合

急信 五返申上候(もす) 草々申進の候(もす) 直草御覽下され度候
草簡がら申入候(もす)

再信の場合

再信 重ねて申上候(もす) 前便すでに御高覽下され候事と存上候

返信の場合

拜復 復答 謝復 敬復 拜蒙 謹答 貴書拜見 御手紙拜見
一寸御返事申上候(もす) 御手紙くりかへし拜見致し候(ました)

註 前略の頭語を用いた場合は凡々の謝礼の言葉を省き早速本文へ入
るべきで、急信の場合も挨拶は略すか極簡單にすべきである。

前文、時候の挨拶

形式に流れすよく時候にあてはまつた言葉で簡單に書くが、暑中見舞
や寒中見舞はかなり詳しく、悔み状や急用の手紙には省くべきである。

一月より二月上旬まで

嚴冬ゴウトウの候 酷寒コウカンの候 寒威サムイ凜烈リンリョウの砌キマリ 本年の寒氣は一入身にしみます
雪後一層凌シノぎ難ガタシく候 寒冷サムイの砌 入寒以來特別寒くなりました

二月中旬より三月上旬まで

春寒ハルサムイの候 春寒料峭ハルサムイの候 餘寒去り難く候處 殘寒却つて嚴しく候
寒柳サムイ疎梅サムイ春を促ウツし類カガに候處 寒氣尚はけしく思はれますが梅花清香ハナコウを
放ハクつ頃と相成りました

三月中旬より下旬まで

春寒稍ゆるみ候處 逐日チツジツ温和ワカの候 春暉日に増し候 池塘の柳日まし
に緑を加へて参りました 連日ツラシの好晴ヨクハル櫻もほつく 開きかけ申候
一兩日來何となく春のハて参りました 日毎のどかになりまさり候

四月

時下春暖の候 暖和の候 清和の砌 櫻花爛漫の好季節 昨今暖氣一
しほ相増し候 柳櫻の候となりました 春色殊の外麗しくなりました

五月

晩春の候 暮春の節 春色漸く相衰へ候 更衣の節 輕暑の砌 向暑
の候 薫風綠樹の候 緑の香なつかしき頃となりました 殘紅落盡の
候 春既に暖くはや葉櫻の頃となりました

六月

初夏の候 麥秋の節 梅雨の砌 田家多事の節 雨窓初淋しき折板
連日の霖雨鬱陶しく御座候 桐の花咲く候 杜鵑夢を驚かす候 梅雨
ばれの天氣誠に暑苦しく 若竹の風なつかしき季節となりました

七月上旬より八月上旬まで

大暑の候 炎暑の砌 三伏の候 炎熱凌ぎ難く候處 午日暖くが如く
盛夏の苦熱釜中にある思ひがします 火傘天に漲り苦熱堪え難く

八月中旬より九月上旬まで

殘暑の候 秋暑凌ぎ難く 炎熱なほ激しき候 朝晩や、凌ぎよくなり

ました 火雲未だ消えず 暑熱漸く餘炎を收めました 初暑の節

九月中旬より下旬まで

漸く新涼相催し候 逐日秋冷相増し 何處となく秋のけはひが見えて
参りました 虫の聲も漸くしげく朝夕秋冷を覚えます

十月

秋冷の候 天高く馬肥ゆるの候 澄碧快爽の候 燈下親しむべき季節
空吹く風も物さひしくなりました 一葉秋を報す候となりました

十一月

霜寒の砌 向寒の折板 孤燈雁を聞く節 進日冷氣相増し 愈紅葉の
時節と成りました 秋色正にたけなはになりました 清霜寒を報じ候

十二月

微寒の候 寒冷の候 陰寒身にせまる候 寒氣増重の節 年内餘日も
これなく 年光愈相迫り候折板 今年も名残少くなりました 年末臨
多忙の折板 日増に寒さに向ひ候 日迫の節

前文「安否」の挨拶

常識として宛方の安否を先に自己を後にすべきであり、又返事をもらふべきでない手紙へ先方の安否を尋ねるは非礼であり、自分方の安否は安を述べて否を書かないのが普通である。相手に心配をかけないとの礼からである。自分方の安否を述べる前に、「次に」「降つて」「他事ながら」「は」「かりながら」等の語を入れるも礼の一つである。すつと目上の人へ

の場合には尋ねられない限り自分の事など述べぬ方がよい。

- 一 相手方の無事を祝ふ場合
 - イ 貴下 皆様 皆様御揃ひ 御一統様 貴社 貴店 貴君 先生
 - ロ 益 愈
 - ハ 御隆盛 御多祥 御多幸 御清穆 御隆昌 御繁昌 御繁榮 御清福 御壯健 御健勝 御勇健 御清適 御佳勝 御發展 御安泰
 - ニの由 の段 の條 の趣 の御様子
 - ホ 大賀し奉り候 お喜び申上げます 何よりの事に存上げます 欣賀候

二 相手方の安否を尋ねる場合

- イ 貴下 (以下はニニ六頁 一のイと同じ)
- ロ 御近況 御近状 御勤静
- ハ 如何 如何遊ばされ候や 如何お暮し遊ばされますか
- ニ 御同申上候 御案じ申上候
- 三 自分方の安否
 - イ 次に 随つて 降つて
 - ロ 小生 拙者 近々 私事 秘方 弊店 弊家 拙宅一同 一同何れも
 - ハ 御蔭にて いよゝ 益 相變らず 依然 舊の如く
 - ニ 無事 無異 恙なく 別條無く 異状なく 息災に 頑健に
 - ホ 清光 滞在 招来し居り 勉學致し居り 營業罷在り 送光致し居り
 - ヘ 候間 候段 候條 候ま
 - ト 降りながら 他事ながら 餘事ながら 恐れながら
 - チ 御安侍下され候 御安心 | 御安慮 | 御休心 | 御省慮

註、御後様にてといふ言葉は始のての人や又しぶりの人に対してはよろしくない。

前文「感謝の挨拶」「陳謝の挨拶」

普通の手紙は時候の挨拶と安否の挨拶だけで前文としては完全であるが、特別な関係にある間柄や何か事情のある場合には、感謝陳謝の挨拶を添へる。これ等は時候安否の挨拶に代ることもあり、併用される事もある。

- 平素は何かと御心配に預り有難く御礼申し上げ候(ます)。
- 先日は御多用中態、御光来下さいまして有難う存じます。
- 平素は存じながら御無音に打過ぎ何とも申譯御座いません。
- 比度は何かと御手数敷煩はし相済み申さず候。
- 御紹介をも待たず突然に御手紙差上げまして恐縮でございます。

主文「起」「辭」

さて(挨拶) 陳れは、就いては、就きましては、等が用ひられる。前文から主文へ移る際「普通」さてを用ひ、候文や改った用件の際は「陳れは(陳意)」を用ひる。就いては「就きましては」は主文が前文と何か関係のある場合に用ひられる。

主文「用」「件」

主文中の用件は其の手紙の最も大事な生命であり、その場合場合に依り書く要領が違ふので、後で精詳しく述べる事にするが大体の注意として守るべき要項二三を今こゝに記して置く。
第一意味を明白にすること。相手か一度読んで意味が分らず、二度三度繰り返して読んで判断するやうな手紙は書きたくない。文中、や。

をつける事も、形の上から文意を明白にする事になると思ふ。

第二 正確に書くこと。「今度出来た軍艦は二千噸とか二万噸とか言ふ事です。ね」凡てかういふ言ひ方を避ける態度で書きたい。軍隊では「等」といふ言葉を嫌ふ。「鉛筆や小刀等」と曖昧な言ひ方を許さず、「鉛筆と小刀と消護讓と紙といふやうに必ずはつきり正確に言はせる。常にさうした心掛でありたい。

第三 印象的即ち相手の心へ深く食ひ入るやうに書くこと。それには修辭法などの知識も多少必要であるが、至誠以て人を動かす熱と力がなければならぬ。心の修養の大切な所以はこゝにある。

第四 簡潔に書くこと。簡潔と簡略とは意味がちがふ。鬼伝左即ち本田作左衛門の「一筆啓上火の用心 おせん泣かすな馬肥せ」と最も必要な用件だけを言ひ落しなく述べるのが簡潔である。いくら長くても簡潔だと言へる。長くなるのを厭つて必要な事を省く譯にはいかぬ。簡略とは言ふべき事も切りつめて簡単にする事で、そんな事では手紙の用をなさぬ。

第五 出来るなら結論から先に書くこと。忙しい世の中では長たらしい手紙を読んで居る事を許さぬやうな場合もある。そんな時結論の一行を読んで、「あ、さうか」と文の内容がつかぬらしたら、大變都合よい事だと思ふ。但し言ひにくい事、失策の言譯等は遠まほしに言ふがよい。

第六 あたゝかみを含ませること。いくら用件は用談のみで簡潔がよいと言つても、用談以外に一言半句も書いてはならぬといふものではない。お互ひの間柄等について、相手の心へふれて思はずも引き入れられるやうな一節を是非入れて、あたゝかみのあるものにした。殊に願ひ事の場合等空世辭は却つていかぬが、涙もろいほんの一言の贈り物で先方の心を動かすものである。大町桂月氏の言葉にも「手紙は礼を失はぬに始まり、人を動かすに終る」とある。

末文「收結の挨拶」

これは手紙の内容と其の感じを一しのにく、り上げる文章で、別札の
挨拶をも兼ね重要な役目をなす。たかりこみ入った其の手紙の要点や、役
目を簡単に繰り返し、改めて相手の注意をひいておくための書き收めて
ある事を知って居たい。

先は、右 取敢ず 取憑き 此致

口御挨拶 御返事 御願(御依頼) 御詫 御礼 御詫旁御依頼 御断り

要用(用件) 御注文 御注意 御照會(御問合せ) 御見舞 御伺 御報告

御喜ひ(御祝詞) 御悔み(御弔詞) 御報知(御通知)

ハまで のみ 申上度 申述へ度

ニ斯の如くに候(如斯候) 此の如くに御座候

註普通はハで切つて「先は御返事まで」とするが、鄭重に言ふ場合には二
の部まで書くべきである。

後便又は面會を約する場合 何れ近日拜趨^{まゐ}萬々申述へ度存候 余は拜眉^ヒ

本細後便にて申上げます

の節に譲り申し候 尚申上げたいた事は多々ありますが後便に譲ること
に致します 書余拜眉

返信を乞ふ場合

貴酬を待つ 御返書待入候 貴意御伺か申上げます 御手数ながら御

返事下され度願上候 御返事下さいませ 御返事御さかせ下され候は

はありかたく存じ候

本文「自愛の挨拶」

收結の挨拶の次、結語の前に「末筆ながら」「末ながら」「失礼ながら」「なほ」等と

書き添へて書く。

○御自愛專一に祈上候(ます) 時下折角の御自愛(御自重)專一に祈上候。

○時節柄御捕か御自愛の程祈り上げます。

○追々寒氣に向ひます故一層御自愛遊はされますやうに。

- 御病後の事故一入御養生の程願ひ上げます。
- 國家のため折角御自重遊ばされ度候。

末文傳言其他の挨拶

- これは添文に書いても末文に書いても差支ない。
- 皆々様へよろしく御傳言願ひ上げます。
 - 御父上様へはわけてよろしくお傳へ下さいませ。
 - 変しい事は何れお目にかゝつてから色々申上げます。
 - 近々に又おたより致します。
 - 母も御無沙汰御詫ひ申し上げるやう申して居ります。
 - 家内皆々より厚く御礼を申出居候。愚妻よりも宜しく申出居候。
 - 本當に失礼な走り書きで申譯ありません。乱筆御判読の程願上候。
 - 急のあしあともよろしく御判じ下され度候。

結語

手紙全体の最後の結ぶの言葉である。此の言葉は行の上へは書かず。書簡箋なら文の終から二三字あけて書き、巻紙なら行の裾に書く。例へ頭語は省いても結語は書きたいものである。

普通の場合

敬具 敬白 拜具 謹言 再拜 頓首 謹白 稽首 拜白 謹上

取急いで書いた場合

匆々 早々 草々 不備 不一 匆々頓首 早々敬具 草々不備

親しい人への場合

では では又 さよなら 失敬 ちやあ 搦筆(これで筆を搦くの意)

女の人か書く場合

かしこ(畏し)の意 私なにか御たよりするのほおそれ多い さやうなら さよなら 敬具(此の語は公式のもの重々しい書状に用ひられる)

目下への場合

以上(この語は特に箇條書にした場合にも用ひられる) さよなら
改つた場合

頓首再拜 百拜頓首 恐惶謹言 恐々敬白 謹上再拜 再拜謹具
返信の場合
拜答 奉答 奉復 敬復 拜酬 奉酬 謹復 貴答 貴酬 草々裁答

日附の認め方

さし當つてそれ程大切たとも思はれない日附が、後になつて非常に役
立つ事がある。重々しい大事な手紙や年賀状、暑中見舞、商用文等には
年月日を必ず認め、其の他の場合も出来るだけ年月日を書く習慣をつけ
て置きたい。但し親しい間柄等にて時によつては
「八日夜」「五月六日朝」「立秋の日に」「端午の日に」「十八日、奈良から」
「二月二十日梅散る窓辺にて」「八月四日午前六時十五分前」

等と書くのもおもしろいだらう。

月の異名は近頃用ひられなくなつたが参考までにあげれば、

一月	正月	睦月	初月	初春	等
二月	きさらぎ	如月	梅見月	等	
三月	彌生	櫻月	夢見月	等	
四月	卯月	陰月	卯の花月	等	
五月	皐月	早月	あやめ月	等	
六月	水無月	且月	田草月	等	
七月	ふづき	涼月	瓜月	等	
八月	葉月	桂月	月見月	等	
九月	長月	玄月	夜長月	等	
十月	神無月	陽月	時雨月	等	
十一月	霜月	神樂月	霜降月	等	
十二月	師走	除月	臘月	等	

日附を書くのによく「一九三五・八・七」とか「10.8.7」といふやうに書

く人もあるが矢張「昭和十年八月七日」「八月七日」等と書くべきである。

署名の認め方

署名は普通年月日の下へすべきである。

姓のみ記す場合

例 楠木 楠木生

之は同輩か目下の者に對して書く方法である故、目上の者には絶対にしてはならぬ。同輩目下の者へも避けた方がよろしい。

名のみ記す場合

例 正成 正成生

相手に對してへり下った書き方であつて、父兄、近親、友人間ではよいたらう。元來姓を省いた略式の書方である故、改つた場合の手紙、目上の親しくもない人への場合等避けねばならぬ。

女子の「親子」「みね子」等の「子」は敬稱であるから附けるなどの説もあるが、近年は戸籍名にも用ひられて居る故差支ないだらう。但し目上の人への

手紙の場合は、省けばそれに越した事はない。

姓名を記す場合

例 楠木正成

これは最も普通の而も最も丁寧な書き方で、相手が目上でも目下でもさしおはりの無いものである故、この方法で書く事を習慣づけたいものである。勿論住所を一緒に書き込んでよい。

連署をする場合

二人以上の名を連ねる場合は下位の人から上席の人へ順に書く。之を逆連記といふ。但し宛名のない場合の連署は此の逆に位の上のものから順に書く。之を順連記といふ。

逆連記の例(宛名ある場合)

陸軍歩兵少尉 土屋 豊

陸軍歩兵中尉 小林正光

陸軍歩兵大尉 鈴木 節

陸軍歩兵少佐 佐藤時丸

陸軍大臣 楠木正成 啟

順連記の例(宛名なき場合)

陸軍歩兵少佐 佐藤時丸

陸軍歩兵大尉 鈴木 節

陸軍歩兵中尉 小林正光

陸軍歩兵少尉 土屋 豊

親子夫婦兄弟等の場合は上下の別が明かた。たとへ宛名が有つても順連記とする。上下の順序の分らぬ場合はアイウエオ順かイロハ順に書いて、其の旨を断つておくこと。

封筒の裏へは住所姓名をくはしく明らかに書かねはならぬ。受取人が見當らぬ時、返送するのに郵便局で大變迷惑するから。

宛名と敬稱の認り方

山	田	八	郎	(夫)
同	同	わ	か	(妻)
同	同	一	郎	(長男)
同	同	と	み	(長女)

本文は草書で書いても宛名は行書か楷書で書かねは失礼になるものがある。

姓だけ書く場合
例 楠木様 木村先生
目上の人に書く方法で、相手をあがめた事になる。

名だけ書く場合 例 正成様 一郎様

これは親子兄弟親戚の同輩以下か極めて親しい友人間に限つて書く方法で、親しみはあるが一般の人に対しては却つて失礼にあたる故注意せねばならぬ。

姓名を書く場合 例 楠木正成様

最も多く用ひられる方法で、相手の身分がどんなによくても悪くても差支ない。

其の他の場合

。「吉田松陰様」と書いて本名の「虎次郎」を無理に出さずに尊敬の意を表す方法もあるがこれは親しい先輩に書くべきで、親しくない間柄では却つて失礼になる。

。「加藤御輿様」「木下伯爵様」等と相手の身分を用ひて敬意を表す。

。「女子で「たけ」といふ人に「たけ子様」と書けば尊敬した事になるが「静江」といふ人に「静江子様」とするのは却つて變にきこえるため。

。「御父上様」「兄上様」「森田姉上様」等、平生呼びなれた稱呼を書けば、

親愛の意が表れるものである。
連名の場合

数人の宛名を連ねる場合は上位の人より順に書く。

例 楠木正成様 (上)

新田義貞様 (中)

北島顯家様 (下)

楠木正成

新田義貞 様

北島顯家

の如く「様」一つ

で間に合せる

は失礼である。

上下の順の不明なのは、口へ順がアウエオ順にして、その旨を明記

すること。

主人と雇人の如く身分の余り雇が離れた人を連名にするのは、どちらへ對しても失礼になる故注意せねばならぬ。

様と致と御中

之等は宛名の下に添へて尊敬の意味を表はす言葉である。

。様は方角を表し、當人に差出すのは失礼故其の方のお出でになる方へ差出すといふ意味で、普通一般に用ひられるものである。

。殿は其の人の邸まで送るといふ意味で、公文書(色々の願書届書申込書)

商用の手紙等に用ひられ、時には目下へ宛て、(親から子へ、叔母から甥へ宛てる場合等)「〇〇殿」「〇〇どの」等と用ひられる事もあるが、

先づ「様」とか「先生」を用ひて「殿」は用ひぬ方がよい。

。御中は団体や華族に當てるもので、「〇〇商店御中」「伊藤子爵家執事御中」等とする。

。閣下は陸海軍の少將以上、勅任官以上、爵位ある人に用ふ。用ふべからざる人に用ふるは失礼である。「陸軍中将磯村武亮閣下」「伯爵香川文

。其他友人同輩間では、君、兄、大兄、賢兄、等も用ひられる。

脇附の使ひ方

脇附は敬稱の外に添へて尚一層尊敬の意を表すものである。直接其の人に宛てずお側まで差上げますとの意を含ませたものである。

高貴の人に宛てるもの
閣下 臺下 尊前 尊下 親事

目上の人に宛てるもの

玉机下 玉案下(机の下の意) 貴下 侍史(お側の書役の意) 侍曹(お側の
お小姓の意)

同輩に宛てるもの

机下 案下 颯北(颯のかげの意) 座右 足下

特種の人に宛てるもの

函丈(先生に) 大雅(文墨の人に) 膝下・御前に(父母に)
猊下・檀下(僧侶に)

女子の文に用ひるもの

御前に 御許へ 御人々(男子の侍史・侍曹と同意) まるる 等

團體の場合は御中(改稱と別に)

連名の場合は各位を用ふ。

高田御家族様御中

特種の脇附として封筒等に書かれるものに次の如きものがある。

。普通の手紙

常用 平信 平安 等

。他見^レ憚る手紙

親展 直披 親披 直覽 親剪 等

これ等は、名宛の人自ら開封してお読み下さいとの意味であるから、
中の宛名へ「侍史」「執事」「御許へ」等の脇附を附けてはならぬ。

。特別注意を要する手紙

常用 御願 弔辭 至急

大至急 届書在中 履歷書在中 寫真在中 託志村定春君

。返信の場合

返信 貴答 責酬 拜答 御返事

添文(追て書)の認め方

本文中に書き忘れた事柄や本文よりも軽い用件、本文中に麗々と書く
を憚るやうな事(人に物を上げたりする場合勿論本文中へ書いて差支へな
いのはあるが)を結語の次へ認めて日附署名宛名を書くか、或は又日附
署名宛名を書いて後認めるか、その時の都合でどちらでもよろしい。

添文は昔は文の書出の前の余白へ書いて「袖書」と呼ばれて、これがあつた。それがあつたのが礼儀とされて居たが、今はさうした事は行はれなくなった。その儀礼を重んずる手紙にはいろいろ、追書をするのは礼を失する事になる。添文はせぬやうにするが、若ししても極簡単にするやう心がくべきである。添文は本文よりや、小さな字で書くか、行の頭を一段下げて書く。とよろしく又普通はその初へ次の文字を記す。

副啓 追啓 追申 二申 追而^{オッテ} 尚 尚々 再啓 再び申上げ候(ます) 例へば

- 。二申 先日御願ひ致して置きました寫眞の事宜しく御願ひ申上(ます)。
- 。尚々お暇の節にお遊みに入らつしやいませ、お待たして居ります。
- 。追て見本として別封にて一部を送り致しました。

相手に依つて違ふ認め方の心得

目上の人に宛てる手紙

言葉づかひを丁寧に、書式(後に述べ)も正しく、用紙も封筒(二重封筒)も上質のものを選ひ書き損しのないやうに注意し、封をし直したり、よごれた切手をはつたりせぬこと、箇條の多い手紙でも結語に「以上は用ひす、敬具、かしこ」にしたがひたい。

同等の人への手紙

兄弟や友達や同僚には思ふまゝ、がすのゝゝ書けて、親しみのある手紙にはなるが、その爲に筆が進み過ぎやるとんでもない事まで書いてしまふ事もある故、心のはすんで居る時等十分の注意を要する。余り粗暴な品な言葉を出さぬ用心をしたがひたい。

雇人や目下の人への手紙

威張つたり命令的に書かぬこと。夫から妻へ、主人から雇人へ、親から子への如き場合、丁寧になくて物靜かに相手を愛しいたはる心持

で書きたいものである。主人から雇人を呼ぶ場合は「君」「あなた」「子
供」からは「〇〇さん」「ねえや」「ばあや」を使う。

老人へ宛てる手紙

老人へは巻紙の無罪書翰箋へなるべく文字を太く書き、文章も解り易くして流行語外國語は使はぬこと。文章の内容もその心をいたはるやうに、身体の故障はないか、お孫さんが大きくなつたでせう、やさしいお心を今でも忘れないといふやうに同情を以て綴る。草体はさげよ、
父母へ宛てる手紙

常に喜ばせ安心させる氣持を忘れてはならぬ。父へはまじりに母へは親しく書くつもりでよからう。文中「お父さん」「お母さん」より「お父さま」「お母さま」「父上様」「母上様」「御父上様」「御母上様」としたい。自分を「私」「わたくし」とするのが普通である。

父母の代筆をする場合

文体も用語も父なり母なりの使ふものにして、用紙は巻紙や普通の書翰箋を用ひ、署名は父母の名を記してその左下へ小さく「代」又は

「代筆」と書き加へる。父母の用件を自分の名で先方に傳へる時は、傳言の部分も明瞭にして餘事を余り書き入れぬこと。傳言を取次ぐ場合相手が目上なら「父からの申出で御座居ますが」といひ、目下であるなら、「お父様がおつしやいましたか」のやうに敬語を用ひる。人の前では自分の父母を「父」「母」といひ「お父さん」といふやうな敬語は省く。

親から子への手紙

父の場合には親權がひらぬき母の場合は慈愛が溢れるが、親心の深さ、廣さが自然に表れるやうな書きぶりで、子供の模範になるやうな心持で書きたい。親に對する子の尊敬心は斯うした所から深くなる。親が子を呼ぶのは「お前」「あなた」が當人の實名がよい。

兄弟から弟妹への手紙

愛しいたはり、親しみみちびく心持が大切である。「兄さんの身になつてもごらん」「美枝ちゃんだからこをよ」といった調子でよい。相手を呼ぶには「道夫さん」「咲子さん」とし「お前はよくない」。

弟妹から兄弟への手紙

明るく正しく親しみ深く書きたい。自分の事は「私」「わたくし」「道夫」
「みえ子」等とし、先方は「兄上」「姉上」「お兄様」「お姉様」等とする。

面識のない人への手紙

一体に言葉も文字もつゝ、しみ深く相手を呼ぶには「貴下」「貴殿」「先生」
「あなた様」「御許様」等とし、自分の事は「小生」「わたくし」「私」とする。
最初「突然で失礼でございませうが」「未だお目にかゝる光榮を有あません
が御令名はかね／＼父から承つて居りました等」と書き、「父の代筆でこ
さいませうが」「〇〇の妻です」といふやうに自分の身分を明かにせねば
ならぬ。余り前口上が長くならない程度で時候や安否の挨拶を述べ、
手紙を出すやうになつた由來、用向の要点を早く書き出すやうにした
い。改つた用件は候文で書く方がよろしい。

久々の人への手紙

先づ御無沙汰を詫び安否を尋ねる。心をこめて先方の安否を尋ねると
ともに、自分方の近況をもなるべく詳しく知らせる。用件の方が大切
なり、「同無事ですましてもよい。近況へ自慢のいた事はよくない。

手紙の中に書く第三者

甲から乙に出す手紙の中へ丙の事を書く場合には、「丙さん」「丙氏」等
と敬稱をつけ、その他萬一丙人の丙に見られても差支のないやうに
配らねばならぬ。私は此の寶小學校で偶然その例に出會ひ、而も手紙
の中で侮蔑された當人の怒りを直接聞いて無理もないと同情し、且手
紙を書く者であらうとなからうと、^{直に}「丙さん」は「丙さん」と書いた
出人に對して不快の感を抱いたので此の項を特に挿入した。
母親から出す手紙でも「私は春惠さんばかりがたよりです」と書いた
のを春惠以外の子供達が見たとしたら、余りの「氣持はしないだらう。

用向に依つて工夫する認め方心得

年賀狀

年賀狀は趣味の手紙であるから、元日や神代のこととも思はるゝ位の

ゆつたりした気分で、文學的の味も加へてその人に合ふやうに書きた
い。「謹賀新年」と葉書に印刷して出すのはお役目式で何の親しみもあた
たかみも持てない。若し又謹賀新年の四文字だけにしろ。自分で字く
ばりを考へて書くか。字の大きさを工夫するかして相手に快感を與へ
るやう心がけたい。

目上の方には封筒と巻紙できれいな墨の字がよろしい。女ならいくら
短くても、「明けましておめでとうございませう。昨年中はいろくお世
話になりました。ありがとうございました。存じます。本年もとうきよろしくおたのみ
申します。かしこ。」位には書かねばならぬ。同輩。目下や目上でも一
般の人へは賀詞を軽々しくしない限り葉書で差支ないだらう。要は出
來る限り自分で書く事である。

日附を「一月元旦」とするは誤りである。「昭和十年元旦」「昭和十年一月一
日」といふやうにする。自分の住所姓名をも明瞭に書くこと。不吉な
文字は書いてはならぬ。喪中の場合は「喪中に付年賀御禮仕り候。御
喪中に付年賀御遠慮致します」とはつきり挨拶すべきである。

來年の年賀状が暮の中に舞ひ込込事がある。年賀状を出す規則を守ら
なかつたからである。年賀状は一まとめにして帯封をかけ「年賀状」と
書いた小さな紙を一番上へ挟んで年賀郵便取扱期間内に投函せねばな
らぬ。

お祝ひの手紙

入學の祝 卒業の祝 就職の祝 新築落成の祝 開店開業の祝 病氣
全快の祝 誕生の祝 七五三の祝 初盆賀 還暦賀 古稀の祝 喜の
字の祝 米壽の祝 榮壽の祝 等々多くあるが、朗らかなる事か第
一條件である。そして人の喜ぶを我が喜ぶとして喜ぶ心の修養を以て
書かねばならぬ。婚禮の手紙には「切る」「離る」「別る」「返す」「戻る」「去
る」「走る」等の言葉を避け、新築落成の手紙には「火煙」「燃える」等の言
葉をのせてはならぬ。迷信ではあるが「忌言葉」とされて居る故注意を要
する。お祝ひの手紙は大抵は先方からの通知に答へる返信になるから
先方の手紙の文句をよく読んで、それに合った祝意を述べること。又お
祝ひの手紙には多くの場合品物が添ふもの故、品物の種類、熨斗、水引

包紙 品物に関する手紙の文句 等十分氣をつけねはならぬ。
儀式張った手紙の一つである故なるべく巻紙に墨で書き、墨は濃く、
字は丁寧、用紙も封筒も粗末でないものを用ひ、時機を失はぬやう
早く出すこと。祝ひ状のあそいのは氣が抜けたものである。
祝ひ状の返事は折返し出さねはならぬ。

お見舞の手紙

分つて時候見舞、病氣見舞、災害見舞の三種とする。
。時候見舞は趣味と實用を兼ねたもので、別に之といふ用事はないか久
しく御無沙汰をして居るので、お詫言、先方の安否を尋ね近況をも報告し
やうといふのである。普通の手紙の前文が此の手紙の本文であるから
余り軽くならぬやう注意し、先方の一人々々の安否を氣づかふやうな
氣で、特に老人や子供のある家庭へは心から近況を尋ねて見舞ふやうに
し、こちらの情況をもおもしろあかしく出来るだけくはしく知らせた
い。「暑中御見舞申上候」と葉書へ一行に書いただけでなしに、簡單で
もよいから適當な見舞の言葉を其の側へ附加したい。暑中見舞は七月

中旬から八月上旬までに、寒中見舞は一月中旬から二月上旬までに
出すこと。

。病氣見舞の手紙は直接本人に出すのと、附添の人に出すのと二種ある
が、本人に出す場合は容態に依つて長短繁簡色々に考へて書かねばな
らぬ。そして病人は神経が過敏だから、四死保滅等の文字は避けた方
がよい。相手や家族の心になつて深い同情の言葉を送り、時候見舞な
ど、違つて時候の挨拶は書かなくてもよろしく、若し書くにしても極
簡単にせねはならぬ。見舞品を送る時は相手の病氣を考へて、病人に
必要な先方の喜ぶやうな物を贈り、品物を送る事にしないで心か
ら慰めるやう心がけたい。人に依り地方に依つては「長びく」といふ意味
から、^{ヤク}飴の贈物を嫌ふこともある故注意を要する。

。災害見舞の手紙は、地震見舞、火事見舞、近火類焼、洪水見舞、風害見
舞、盗難見舞、怪我見舞、其の他落雷、海嘯等突然起つた出来事に驚い
て認めるものである故、その心持の表れとして時候挨拶など省いて、
「唯今新聞で見れば御地は目下大火の由ひのくりしました」といふやう

に書き出して見舞の言葉を述べ。そして葉書でもよいから早く出す。親しい間柄である時なと返信料つきの電報を打つと更によい。

「拜啓 電報によれば御地大地震の由 御家内御一同御無事に候也。」

右御見舞申上候 以上

十月二十三日

子規

露月 兄

再白 若し御無事に候は、地震の記御報下され度候」

これは明治二十七年十月二十三日東北地方大地震の際正岡子規が俳友石井露月へ送った災害見舞の手紙である。凡て電文的に簡單でもよいから早くせぬと誠意は固かぬ。先方から返事が来るか、でなくともちよつと経つたところで、見舞品を送へて同情の言葉を述べるとよい。

招待の手紙

相手がその手紙を見たな何うしても出掛けなければ居られぬと思ふやうに、心から歓迎する好意が紙面に溢れ居なければならぬ。時候の挨拶は有つても無くても構はぬが用件は出来るだけ委しく、招待の目

的^レ理由(初^タ端^タ午^ゴ祭禮佛事新築祝開店祝結婚披露筈) 必要な時間及場所

先方の注意すべき事項(出席の可否の返事をほしむとか、その外にとんな人達が集るとか、女の場合なら時節柄服装は不断着がよいとか、相客は誰誰であるから銘仙位でよいとか) 発信者の姓名住所発信の日附等を明記して、出来るだけ早目に出すこと。相手が出席の可否を通知する返信用の葉書を同封するとよい。招待状を受けたなら必ず出席出来るか出来ぬか返信せぬと、先方では準備の都合もあるので非常に迷惑する。返事は早いのがよい。

招待の手紙と似て案内の手紙がある。案内状は會費を徴収する會や會員や生徒として出席の義務ある會(卒業式記念式等)に人を招く文で、會合の目的、日時、時間場所、會費の額と支拂の方法(當日御持参など)出席欠席の通知の指定、主催者又は世話人の氏名等を記す。案内状には「御出席下さり度と書いても招待状には、「御多繁中恐れ入ります何が何とぞお出で賜りたく願ひ上げます」と書くなど、一般に招待状の方が相當の礼式を具へ、鄭重にすべきである。

勸誘の手紙

勸める手紙と誘ふ手紙の二つに分ける。

。勸める手紙は自分が善と信ずる事を、熱を以て人に勧めるもので、入
。學の勸誘、入會の勸誘、保險の勸誘、寄附の勸誘、養鶏の勸誘、冷水
。摩擦の勸誘、等人に美徳を施す覚悟で、熱誠をこめて筆を取らねばな
らぬ。

。誘ふ手紙は梅見、潮干狩、海水浴、音楽會、紅葉狩等主として物見遊
。山へ人を誘ひ出す手紙である。招待の手紙は人を客として自宅へ招く
。が、これは人を同伴者として他へ引き出すのである。日、時、場所、
。同行者、支度等大事な事柄は漏らさず書くこと。口先ばかりの勸誘で
。なく、とんな用事をさしおいても出かけなければならぬやうに書か
。ねはならぬ。
。勸める手紙を受けたなら諾否は別問題として、其の好意に礼を言ひ、
。誘ふ手紙を受けたなら行くか行かぬか、行くなら何日の何時までにど
。ちらへ行くとか、何所で待って居るとか、行けぬなら何故行けぬかど

贈物に添へる手紙

の理由を必ず書いて返事すべきである。

「粗品一つ」といふ謙遜した氣持が大切である。或女學生が修學旅行のお
。土産に添へて、「何の變つたお土産をと思ひながら、これはといふもの
。も見當らず、やっと最終日に買ったのがこれですの。趣向も細工もお
。目にかける程のものではございませんが、遠方からわざわざ持つて來
。た志に免じて、どうぞお納め下さいませ」と書いて居ますか謙遜の中
。に好意がほの見えて嬉しい氣がする。

鮮魚、草花、野菜、お萩、等急を要するもの、使者に持たせてやるも
。のに添へる手紙は簡潔に、時には名刺の裏でもよろしい。寫眞、雜誌
。招待券、等急を要しないものには軽い冗談ジョークでも交へておもしろく、謝
。礼、結納、形見、その他重々しいものには簡潔で莊重な添へ手紙がよ
。ろしい。又遠方から小包や鉄道便で贈る品物に添へる手紙には時候の
。挨拶も近況報告もあつてよろしく、珍しい品物にはその由來を書き、
。料理法や使用法を説明する方が親切である。届け方については、「使を

以て「別封書留小包にて」「何商店よりお届けします」「鉄道便に致し候
間明日は相届き申すべく」等とその方法と月日を明白に書かねばなら
ぬ。到来品は到来に任じ「遠來の品」と正直に書き、贈る方は「お福分いた
し」といひ、貰った方では「お福分下されといふ。目上には「差上」の語を避
け「進上」「拜呈」お目にかかけ等とする。目上からの贈物は辞退せず感謝して
受けるのが礼で、寫眞を目上から贈られた時先方の希望のない限り、
自分の寫眞を贈つてはいけない。
添へ手紙のない贈物は礼状を出すのにちよつと困る故、せめて葉書で
もよいから添へて欲しい。添へ手紙や贈物が着いたならお礼手紙を出
さねばならぬ。

お禮の手紙

第一に早く出すこと。「取敢へす御禮申上げます」といふ位がよい。もし
やつくり書く暇のない時は、委しい手紙は二三日おくれるとしても、
取敢へす一應の挨拶をして置かねばならぬ。第二に感謝の意を十分に
述べること。どんな軽少な物でもその誠心に対して丁寧にお礼を述べ

紙上に真心が溢れてピンと来るやうにありたい。第三に見えすいた世
辭を言はぬこと。礼も過ぎれば非礼になる故心にもなき空世辭は書か
ず真心のあるところを述べればよい。短くも勿論礼状は封書にしたい。
栗ありかたく候

真心の虫喰ひの栗をもらひけり

鴨三羽ありがたく候

淋しさの三羽減りけり鴨の秋

これは正岡子規の礼状である。「真心の虫喰ひの栗が振つてぬる。」

通知の手紙

通知の手紙は実用の手紙故成るべく簡單で要領を得るやうに書くこと。
前文も時候挨拶も略して「早速ながら本日左記の所へ轉居致しましたか
ら取敢へす御通知申上げます」といふやうにして轉居先をくはしく書
けは「轉居通知の手紙」と「荷物發送の通知」「註文品到着の通知」「仕立物出來の通
知」「入營の通知」「入學試験合格の通知」「就職の通知」「轉任の通知」結
婚の通知」「死亡の通知」等息を要するものは葉書でもよろしく、中に

は葉書へ印刷する事も少くないが、病氣の容態や風水害の程度を通知する文などは、出来ただけ委しく書くのが親切である。

旅行先からの通知文はその所々の繪葉書を利用するのがよろしく、^轉居の通知は轉居先を委しく、鏡みにくい町名村名には假名を振り、病氣の通知は容態を委しく、物に関する通知は數量を明瞭に、時に関する通知は年月日時間を正確に、場所に関する通知は府縣市郡町村名等を詳細に認め出来れば地圖を附けるくらいにしたい。

紹介の手紙

これも實用本位の手紙である。簡単なものなら名刺の表に「松本様を紹介します」でもよし、「御多用中恐れ入りますが、此の名刺持参の山本輝子様に一すお會ひ下さいませ。御願ひ申し上げます」でもよい。だが普通は本人の履歴、身元、性行等正直に書き、一度本人に見せて發送するか、封をせず、^シを書いて本人に渡す。紹介をして貰ふ本人は「拜見さして戴きます」と断つて一読の後、自分で湖附をして紹介先へ持参する。その時紹介状に自分の名刺を添へて出し、不在の時はそのまゝ預け、次

の訪問には自分の名刺だけで行く。面會後は紹介者に礼状を出すこと。紹介をする人の注意として、目上に紹介する時や用向の重大な場合には紹介先の内意を聞いてからするのが禮儀であるが、手紙の上では言葉をやや丁寧、紹介の用向、その人と自分との關係など明かにし、將來とも紹介先へ迷惑をかけぬことを書かねばならぬ。

お願ひの手紙

十分礼をつくして言葉遣を丁寧にしなければならぬ。殊に相手が目上の人である時は尚更である。そして用向は出来るだけくはしく、あなただけなければなりません。といふ頼り切つて居る心持で書きたい。一度で駄目なら二度、二度で駄目なら三度、誠意をこめて追つての手紙を出す必要もあるだらう。然し余りくと過ぎると相手を不愉快にしてみましたので、依頼に對して返事が無い場合は、相當の期間を置いて遠廻しに催促するやうにしたい。余り懇意でない人にものを頼む時は返信料を封入した方がよい。又費用のかゝる依頼ごとであるならば、その費用を適當な時に送つた方がよいが、人に依つては失礼になる故

注意すべきである。就職の依頼には必ず履歴書を二三通、少くとも一通は入れること。借金を頼んだり、借金の返済を待つてもらったりする手紙は、かきらすに實情を詳しく述べて真心を示して同情を乞ふことが大切である。急な場合や氣易い人には、必ず本文を書き、込み入つた用事や目上の人には、時候の挨拶から書き出す。

問合せの手紙

實用の手紙で成るべく簡單明瞭に質問の要点をしつかり徹底するやうに書き、商店や会社等なら葉書か往復葉書に、友人なら葉書に、極親しい間柄か高貴の人以外の目上の人には、封書に認めて三錢切手を封入するがよい。未知の人に問合せする時には、會社銀行商店以外は、矢張札を盡くして前文に時候挨拶を述べ、またお目にもかゝらず失礼では御座いますか。位の前置はくなくならぬ程度で必要である。傭人の身元、縁談についての血統調査、等秘密の問合せは慎しむ深く筆をとり、決して他へ洩らさぬ事を誓ひ、尚書留にして送り、先方からも書留にして送つて貰ふやう相當の切手を封入して置きたい。書体は楷書

變体假名は用ひぬがよい。問合せの手紙を受けたら必ず返事を認める事。返事には問合せの事項を洩らさぬ事。返事が来たなら折返し御礼状を出す事。その他問合せの手紙には、「御迷惑なから」「御多用中恐縮ですが」といふ文句を忘れず、返事を待つて居る旨をも示さぬはならぬ。

註文の手紙

實用本位の手紙故前文や結びはあつても無くても構はず。その代り自分が註文される人になつて本文はくはしく分り易く、品名地質數量代金時日等は明瞭に書かぬはならぬ。電文を渡すやうな氣持で書くことよ。代金を書く際一、二、三十の代りに壹貳參拾と書く方がよく、文体は口語体で句読点を打つと更によい。註文事項の數の多いのは箇條書にし、自分の住所姓名は楷書ではつきり書くこと。

。貴社御發行の日本イソップ繪物語壹部至急御送り下さい。送料夫

。壹圓四拾貳錢、小爲替券を同封致します。

。進物にするのですから、呉服切手拾圓のを二枚、別々に體裁よく

包んで 明日正午まで拙宅へ御届け下さい。

催促の手紙

實用本位の手紙でなく、書き方は難しい。當然催促すべきものでも
余り頭から突込んだ書き方をせず、「済みませんが」「お氣の毒ですが」
恐れ入りますが、「重々御察しは致しますが」「でも是非々々頼みます」
といふやうに、先方に同情した心持を表し人情にからんで催促するが
よい。貸した金の催促等も余りこて／＼書かす相手の感情を害しない
程度にあつさりと述べ、「少しばかりの御用立て、催促がましい事を申
上げて誠に相済みませんが、目下手許が不如意で困つて居ますので
ついこんな手紙を差上げますやうな次第、何うぞ悪しからず思召し下
さい」と結ぶ位がよい。候文の書ける人は催促の手紙やお断りの手紙
は候文の方がよい。

お断りの手紙

何しろ先方の意に背き期待を裏切る手紙故、とんなに上手に書いても
相手の感情を傷^キはない譯には行かず、書きにくい手紙の一つである。

然しどうせ断るならきつぱりと早く断つた方がよい。氣の毒と思つて
愚圖々々してゐると却つて先方に迷惑をかけ、こちらにも憂鬱を重ねる
だけである。保険の勧誘、同志會への出席、觀劇の案内、寄附金等の断りは
比較的容易であるが、縁談や借金の断りは苦しい。よくこちらの實情
を述べ、誠意をこめて断るのであるが、物も言ひやうで角が立つから
婉曲法を用ひて遠廻しに言ひたい。

○ 白いものが朝からチラ／＼降つて居ります。御寒さも愈加つて参
りましたか御機嫌よく御過しの由御喜ひ申上げます。昨日は御親
切にクリスマスマスの御祝ひへ御招き下さいまして有難う存じます。
楽しい御家庭の御集^{ツド}ひの中へ特にかうして加へて頂く私は、毎年
クリスマスマスを指折り數へて待つて居ります。今年も是非とも参上
致し度存して楽しみに待つて居りましたが、折悪しく母が先頃か
ら工合が悪いと申して引籠つて居ります。寒さの折に病人の母一
人置いて留守に致しますのも濟まなく思はれますので、折角の御
好意を無にするやうで申譯も御座居ませんが、事情御察しの上御

許し頂き度成念ながら不參致します。御母堂様へは貴女様から宜しく御傳へ下さいませ。(招待を断る女子文)

断りの手紙には全部の断りと一部は承諾し一部は断るといふ書方もある故その範圍を明瞭にすること。頼まれるより断る方がとれ程情に於て苦しむかといふ誠意を文面に躍らせ相手を納得させるとよい。

お詫びの手紙

義理をかいたとか、約束を違へたとか、期限が遅れたとか、物を取違へたとか、借りたものを損じたとか、大切な物を失ったとか、御無沙汰のお詫、同窓會に不参のお詫び等、先方に対して失礼をした時出す手紙であるから、決して自分の悪い所を辯解がましくかざらぬやう、そして先方の感情を知けるやう低頭平身、平あやまりにあやまる心持が大切である。といつて馬鹿丁寧で空々しいお世辞を述べると却つて先方の氣を悪くするので、包まず隠さず正直に率直に、他人の罪まてかぶる位の犠牲的の眞心を以て書きたい。

相談の手紙

相談の手紙には極秘密にせねばならぬ手紙が多い。故に相談の手紙を受けた人はその秘密をどこまでも守つてゆく誠意がなければならぬ。相談する場合は相手を充分信用して、何も彼も一切の秘密を打明けて相談し、奥歯へ物が挟まったやうな頼み方をしてはならぬ。相談して返事をこあらへ頂くものであるから、時限の挨拶も述べたり一應の礼をとつて、折入つて相談をするといふ眞剣な態度を見せ、先方が色々考へて呉れるのに必要な事柄を、出来るだけ詳しく述べ決して先方から問ひ返される事のないやうにすべきである。最もよき相談相手は叔父さん伯母さん恩師先輩等よく自分を知つて居て呉れる人がよく、一方相談を受けた人は熟考に熟考を重ねて返事を出すこと。

慰の手紙

悲しみに波んでぬる相手の涙を、自分の涙で拭いてやる心得が必要である。「御心配は御尤もです。私も度々さうした……」とか「私の兄も一度さうした破目におちいり……」といつたやうな調子で相手の不幸に同情し、その悲しみの中から勇氣を出して立ち上らなければならぬとい

ふ氣持を抱かせるまでの熱と力がなければならぬ。正岡子規が試験に落第した友を慰める手紙に

御承知の如く小生も落第の先陣致し候者。されは小生の経験を説かんに、落第して損したるは一年の歳月と一年の學費なり。得たる所は學識に多少の精進を加へし事なり。學費と歳月とは固より惜しむに足らざるなり。其の損得は言はずして明かなり。……韓退之は三度まで落第したれども、後世にては八大家の隨一とこそ呼はれ其の時及第したるものは、今に至つて名も何も残らぬも笑止の至りなり。小生の考にては、小失敗は猶水を堰くが如しと思ふなり。堰かる、水は激せられて益、其の勢を増すものなればなり。……とある。「同病相憐れむ」とか。眞に同情し眞に慰める事の出来るのは、其の悲しみを體驗したものでなければならぬ。悲しみに憐む人は凡そ自分より不幸なものはないと思ひつめて居る場合が多いから、その迷ひを解いてやるのが最も大切である。不縁の人などには眞面目に言葉すくなく、思ふにまかせぬ世の味氣なさを説いて、健康を害せぬやう

心からの同情を寄せてやるかよい。

敬爾の手紙

聲浪並ひ下るといふ熱烈なる眞情が籠つて、眞剣な態度が表れて居ねばならぬ。五里の山道をわらちかけて急いで来て、「うちのことばしんばいするな。天子様によく御ほうこうするだよ。わかったら、もう一度鐵砲をあげろ。」と叫んだ^(老婆の)其の聲は一太郎を、日本の兵士全体を、日本國民全体を激勵した。人を動かす事の出来るものは至誠より外にあるべき筈かない。言葉は心の聲である。満身に漲つて居た愛國の熱誠が、一太郎の母の一言となつたのである。友松圓諦氏の母の手紙が「黒學な母の力としてキングに出て居たので参考までに載せる。勿論我が子圓諦氏に宛てたものである。實によく母性愛の眞情がこもつてゐる。お前がいやたといふので、私もその氣になつたが、しづかにかんかへて見ると、お前を坊さんにしようとしたのは、お父さんでした。そのお父さんが死んだからとて、お父さんの心にそむくお前を引きとる譯にはゆきません。とうかりっぱな坊さんになつて下さい。

忠告の手紙

良藥は口に苦く忠告は耳に逆らふ。忠告の手紙は容易に書けるものではなく、度々書くやうな場合もないが、いさ書くとなつたら一心に、とんなに恨まれても憎まれても構はぬといふ覺悟と注意深い誠意が必ずである。相手を自分から失ふか、思ひ通りの善人に立返らせるか、二つに一つの運命を決める冒険である。樋口一葉女史が「友のあごりをいさぬる文」の終に、「お怒に觸れなば、私は此のまゝお目にかゝる事になすまじく、一生憎まれまゐらすとも、いさゝか恨みに思ふまじくとあるが實に命かけの忠告である。又此の決心がなければとても人を動かす事は出来ぬ。とんな苦々しい露骨な忠告でも日頃尊敬して居る人からされると、骨身にしみて有難く思ふものであるから、人に忠告しやうといふ位の者は、平素修養に心がけて自己の人物を磨いて置かねばならぬ。然し一般には相手の人格や個性を重んじて、なるべく忠告がましい言葉遣を避けて丁寧な、むしろ相談するやうな態度に出るのがよい。

お悔みの手紙

巻紙へ毛筆で丁寧を書く。時候の挨拶も安否の挨拶も一切書かず、直ぐ本文へ入り、死去と聞いて直ぐ駆けつけたといふ心持で、「承り候へば」とか「御祖母上様には豫て御病のところとかいふやうに書出す。驚きの心を示すために巻紙の前後のあきをわざと短くしてもよい。若し書簡箋を用ひる場合は、繪模様や金線銀線のは避けねはならぬ。インクは普通のブルーブラックがよく墨ならば全体を薄くする。手紙の悔み言葉は、「御愁傷」「御傷心」「御哀悼」などあるが、親子兄弟夫婦の死を悔むには、「御力落とし」が適當である。御死去といふ言葉はいかぬ。「御逝去」「御永眠」「御かくれ等」がよい。「逝去」は従三位以上、「御卒去」は従五位以上、御逝去は正六位以下に使ふのが正式である。本文は短くてよいが、十分和意が表れて居らねはならぬ。文中「重々」「重ね」「又々」「且又」「尚々」連つて「次に」「再三」等は忌言葉故使つてはいけない。「重々お察しします等」とうっかりすると書き易い故、注意せねはならぬ。「誠に」「厚く」「ご」と位言葉がよからう。又悔み状には絶対に追て書を書いてはならぬし、本

文中に餘事を書いてもいけない。香典を送る場合は本文中にその旨を認め、爲替券又は銀行の小切手等送るには紙に包んでその表に「御霊前」と書いて同封する。表へ書く言葉は相手の宗旨に依つて違ふ。

佛教——御香典、御香料、香典、香奠、香華料、御佛前、御霊前、薄賻

神道——御神前、御玉串料、御神料、御神、御霊前、薄賻

基督——御花環、御花料、花環料、御霊前、薄賻

先方の宗旨の分らぬ場合——御霊前、薄賻

巻紙へ書く場合、墨は薄くして書くと書かれ居りました。無理に濃くせぬ程度でよい。巻紙の折りは普通は文字を内側にし、裏から巻くが、悔み状に限り文字を表に出す。尚今は行はれぬが昔は、

祝ひ状は折目を寺敷にし、悔み状は偏敷にしてゐた。悔み状の封筒の

「メ」の點は下へ抜き出るが、「メ」の如く下ばかりにする。普通の手紙には

「メ」の如く點を上にする。

悔み状を早く出して、三七日の法要もすんだ頃、慰めの手紙を同情の念から湧き出た文字で綴り、十分に慰の勵ましてやるとよい。勿論此

の手紙は長い程結構である。

近況を知らせる手紙

趣味の手紙と見てよろしい。相手の人に心配をかけない中にこちらの近況を知らせる手紙で、暑中見舞や寒氣見舞の手紙が主として先

方の安否を問ふのに反して、この手紙はこちらの様子を知らせるのが目的であるから、出さるだけくはしく、常に相手の人の事を考へて、

その人に關係のある事柄を特にくはしく書くやうに心掛ける。用紙は

巻紙よりも洋紙にペンで澤山書く方が相手にも喜ばれるが、相手を心

配させるとか、相手に嫌な感情を興へるやうな事柄は避けねばならぬ。

時候挨拶も先方の御機嫌同ひも勿論書く。日記を飛びく、にうっして

送るのもよいものである。要するに延びく、とした心持で思ふ存分に

筆を延び、こちらの様子が有りありと相手の眼に見えて、相手の人を

趣味の手紙

喜はせる事が出来るまでに書きたいものである。

これといふ用事のない時、面白い事をいろいろ、書い手紙で、文學的

返事を出すべき手紙

の手紙である。「寒暑見舞も近況を報ずる手紙も趣味の手紙の一種であるが、寒暑見舞は先方の安否を問ひ、近況報知文は疎遠を詫びる意も含まれて居るが、趣味の手紙はそれ程の用事も無く、やらなければやらないで済む時に書き送るものである。この手紙の多くは旅先からの手紙で、旅のさみしさから人なつかしくなつて、「元旦の伊勢から」「新緑の奈良から」「月見草咲く海岸から」「紅葉の塩原から」といふやうな手紙となる。趣味の手紙は誰が見ても差支ないものであるが、常に宛名の人に話しかけて居るといふ事を忘れてはならぬ。故に相手に関係のある事を多く選び、其の人の趣味に合ふやうに書くのがよい。用紙も封筒も趣味に合ったものがよろしい。

便に持たせる手紙

までとして返事し、その参しくをなるべく早く出すこと。使の人の身分、自分との関係を明かにし、女中に持たせ、「友人〇〇君に頼み」と書く。返事を要する手紙は文中にその事を書き、使にも口上を以て其の事を傳へさせる。封書は紹介状の外は封をしてから渡す。封筒宛名の左下の方へ「使狀」「誰々持参」等としておけば一番よい。

正しい手紙の書き方

巻紙の書式と折り方

祝賀弔慰等鄭重な儀禮に関する手紙は必ず巻紙に書かねばならぬ。巻紙には毛筆で書く。普通は一行に十字位、短文なら七、八字、長文でも十二三字位にし、行間は文字の幅か、その半分位にする。昔は前の明きは三寸六分、奥(終)の明きはその半分、本文から日附まで三寸六分

日附から宛名まで三寸六分とし、これを「三六三方の短」といつて正式とした。然し現在は前の明きが十二種(四寸又は掌一ぱい)後の明き九種(三寸又は指三本)とし、本文から日附までは三種(一寸)日附から宛名まで四種半(一寸五分)とされてゐる。天地(上と下)の明きも昔は目上の人には天を廣くあげ、目下の者には地を廣く明けたが、今は必ずしもその式を守らず、大体十二種(文字一字分)位明けるのが普通である。

日附の高さは本文より一字下り、署名は日附の真下に、巻紙の中矢以下より書き出し、下は本文の裾と揃へる。宛名は日附より半字上り、本文より半字下り、脇附は取極の左下へ字体をや、小さく書く。追書は宛名より一行分離し上は一字下り字体を小さく



認める。襷紙(手紙の前の明き)の廣さは、目上の人や特に鄭重向の手紙にはなるべく廣くするがよい。

折り方は契(透)の方から文字を内側にし、約大纏(三寸)幅に折り、宛名に折目のか、らぬやうにし、巻き終った襷紙の端は巻いた折端へきつ

書翰(ハシラ)の書式と折り方

た襷紙の方を封筒の表に向け、さかさにならぬやう封筒へ入れる。 罫線に依つて書けばよいが、繪模様の上には成るべく避けた方がよい。罫線の無いものは罫紙を敷くが又は、左右を三センチ千分ニセンチ千の同寸にあけ、天を五センチ千地を三センチ千位にあけ、一放へ十行から十三行位までにし、短文や罫紙の密なものは一行程がよい。日附署名宛名を前附とする場合は、第一行は明に、第二行目に宛名を本文より一字下りの見當で書き、日附は第三行で宛名より一字下り、署名は其の下又は第四行で、横長の紙なら中部以下、縦長の紙なら三分一あたりから下に書き、本文の裾より一字上りぐらゐに書き終る。本文はそれより

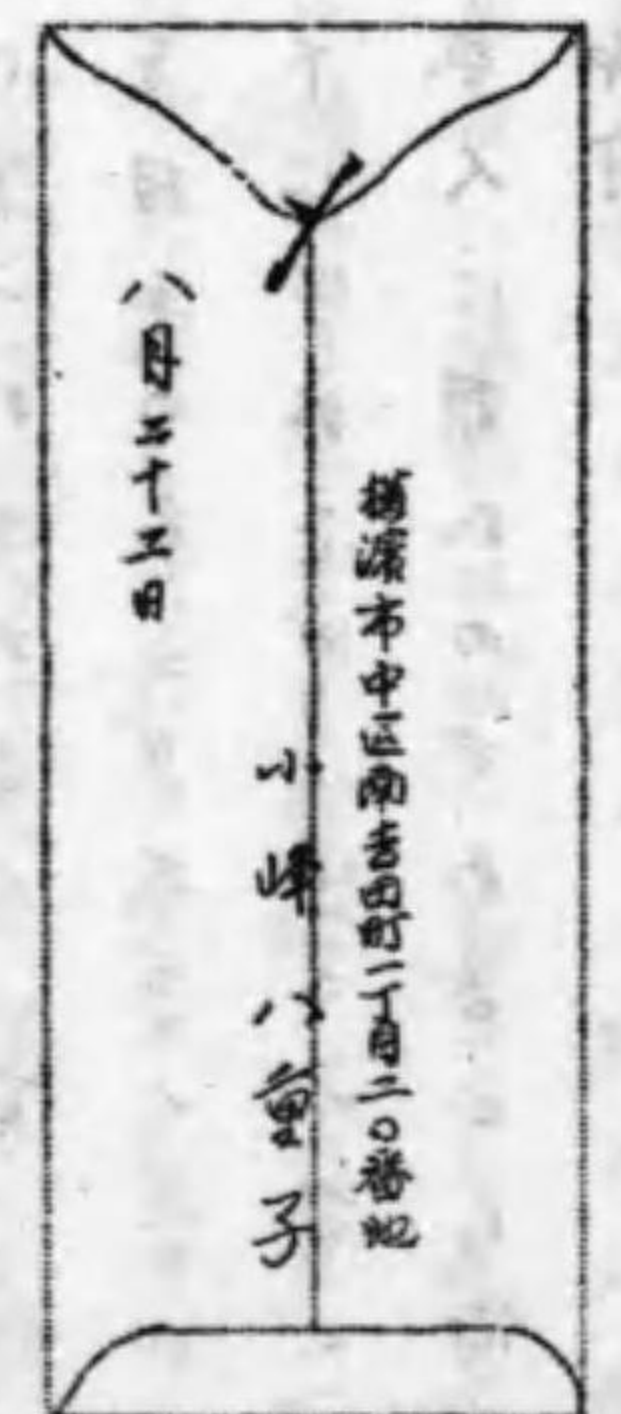
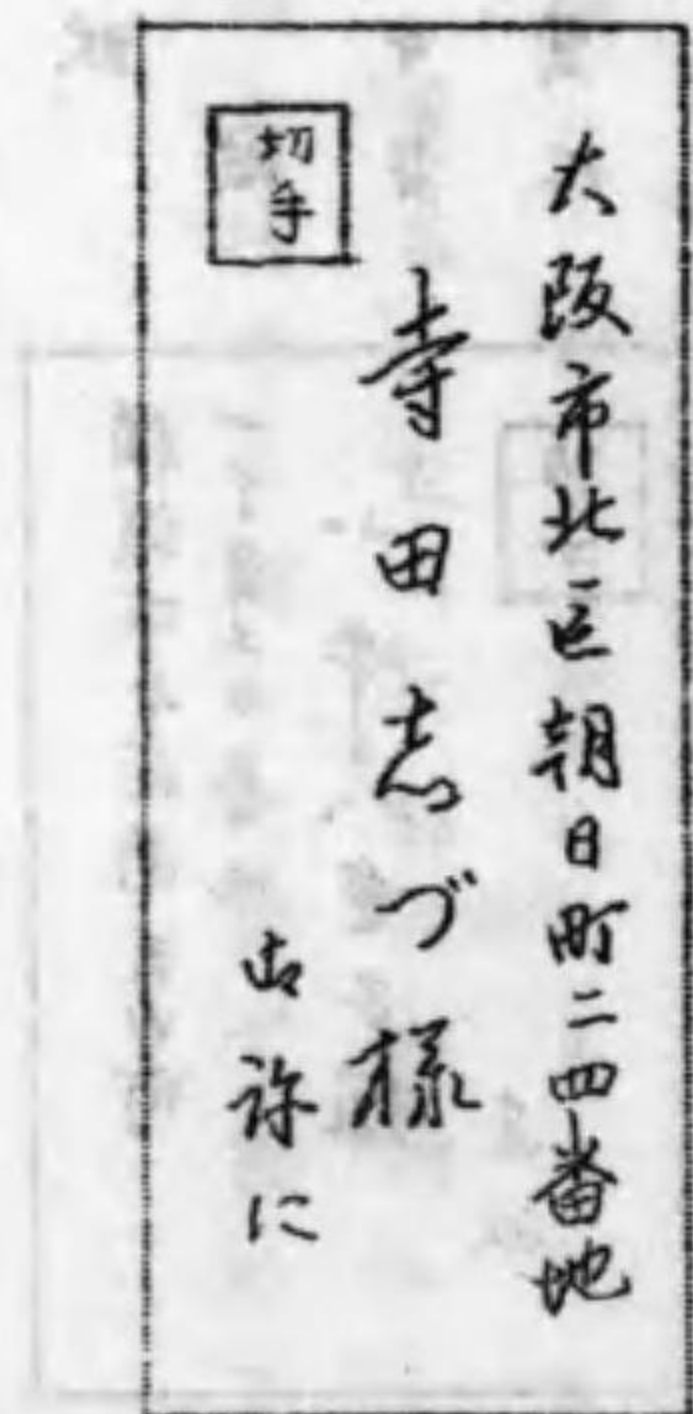
一行あけて書く。後附にするならば本文を終わった次の行が日附。その次の行が署名。一行置いて宛名とする。本文が一枚で終り、後附だけか二枚目になるといふ不體裁をせぬやう。注意せねはならぬ。普翰箋は文字を右側にして下から上へ二つに折り、普翰箋の裏向きになつた上部を封筒の表に向け、裏上へ二つに折り、普翰箋の裏向きになつた上部を封筒の表に向け、裏向になつた後部(左手)を封筒の底になるやうに入れる。日附署名宛名の前附は普翰箋に限り行まれるものなる事に注意のこと。

字配りと墨繼

巻紙の墨繼は昔はやかましく言はれたが、今日では語句の切れ目と墨を繼ぐとして差支ない。普通の手紙は薄い墨で書いてはならぬし、濃すぎる下品である。念し慶事には少し濃い目に、凶事には薄目にす。相手の宛名を自分の署名より薄い墨やかすれた字で書いてはならぬし、自分の名を草体で書く事も遠慮するがよい。頭語の「拜啓」「父上」等の下に一二字あけるか全部あけるか。候「付聞」由「趣」等の語は行の頭に出さず、「御貴尊」等等の語は行の末尾に置いては

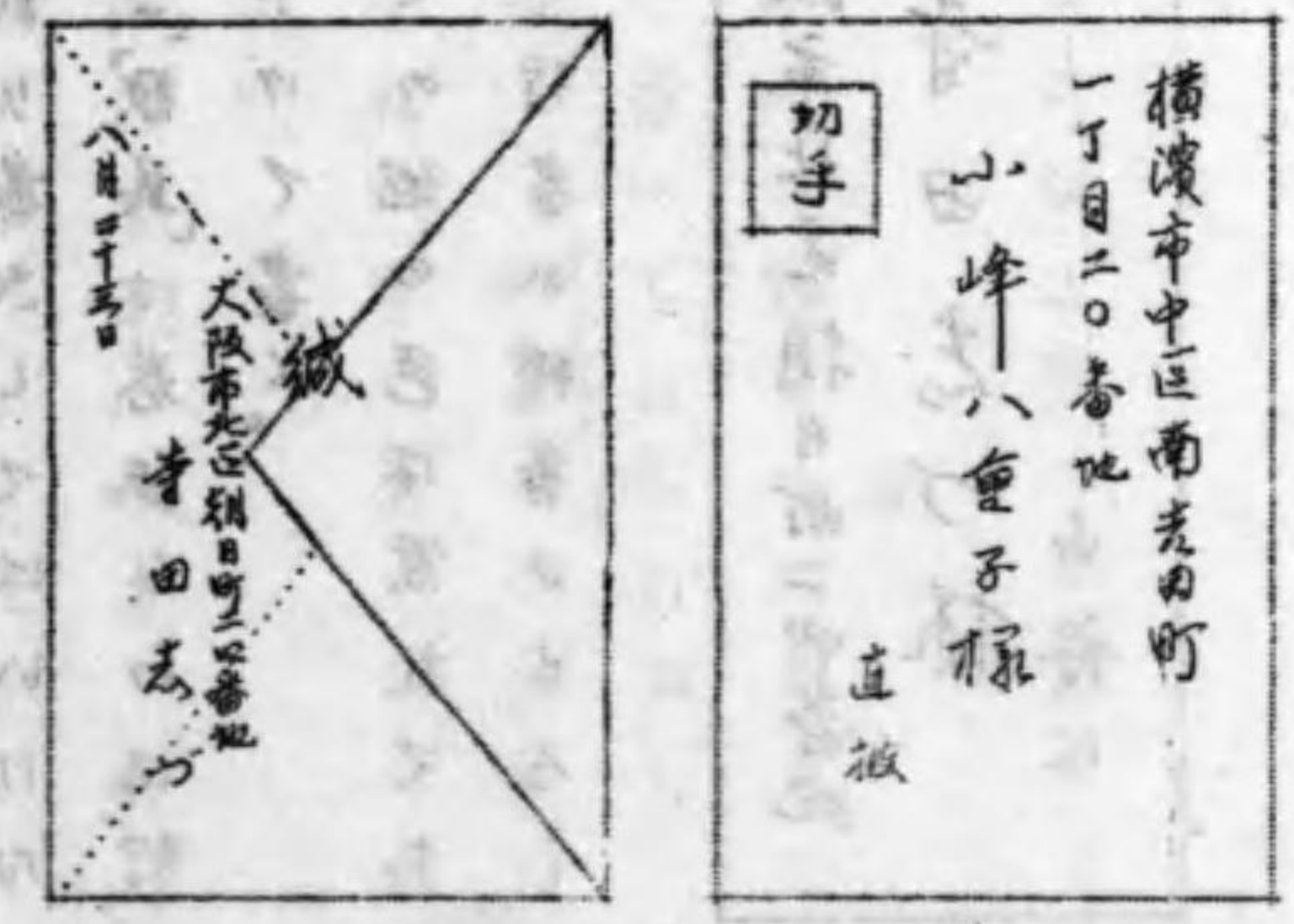
ならぬ。人の名前を行の下にしたたり、二行に割り書きしてはいけな。金額も二行にわたらせてはならぬ。かしこ「器具」は巻紙ならば行の無。普翰箋なら本文の終から二字か三字だけ下けて書く。普翰箋に書くインクの色は藍色か黒にして、その他の色は無礼であるから注意せねはならぬ。書体は凡て草書でなく行書か楷書がよろしい。和封筒の綴り方と扱ひ方

縦長の日本封筒は儀式向には白。目上宛にも白がよいか。配達までに汚れたりするので、普紙を下にした二重封筒を一般に使ふ。表面は中央に宛名を書き、上下のあきは略同守か下を少し余分にあける。上宛名の二字分、下は三字分。住所は宛名の右肩に書き、なるべく一行に長ければ二行に、若し〇〇様方、〇〇會社内等の方附な



(和封筒綴り方)

らそれを別行に認める。二行に書く場合は第一行を大きく、第二行は
 や、小さくしてかく。配達の便宜上住所を相手の名より大きく書いて
 も差支ない。封筒の脇附は「様」や「御中」の左下に字体をや、小さく書く。
 郵重向には侍史(紹介状はいくら目上でも本人に頼むのであるから、御座
 右「御許」など)とするが普通は「御許に、御前
 に、平安、親展、親剪、直披、至急、使状、
 急使、專使持参、御願用、御礼、御弔詞、
 書在中、御返事在中、拜啓、等を用ふ。中身
 に「御許」として封筒に「侍史」としたり、封筒に
 「親展」として中身に「侍史」としたりしてはならぬ。
 切手は表面上部の左隅に眞直に、消印が宛名
 を汚さぬやうな位置(上と左を三ミリか六ミリ
 くらゐ明けた所)にはり、出来るだけ高額の切
 手を数少くはりたい。裏面は差出人の名を中
 央以下に、住所はその右肩に小さく、日附は



(方 証 簡 封 洋)

右でも左でも余白を利用して体裁よく書く。署名は罫目の上になつて
 もよく、それを左に外して書けばなほよろしい。封の文字は「シ、封、紙」の
 と札かにして、「書」とか英字は避けたかよろしい。繪模様は宛名
 や住所が分らぬ事がある故注意を要する。封の糊附は十分注意して途
 中で開かぬやうにせねばならぬ。
 洋封筒の認め方と扱ひ方

裏は糊のついて居る部分を右から左へ折り、封字を書いてもよく日附
 を封の代理にして上から書いてもよく、署名は左の下部に住所とも
 書く。表は上下を裏と同じにして和封筒の場合と同じ心得で認める。
 住所の認め方

宛名の住所は府縣名から書くが、大都市は市名から書く。宛名の番地
 は「四一三番地」の如く書くが、下に余白がない場合は「四一三」でも差支な
 い故、二行にわたらぬやうにする。その場合自分方の番地も「二五一」の
 如く書く。「何々方」といふ方番地は住所の次に行を改めて書くかねはばら
 ぬし、先方から「黒田方」と書いて来ても、こちらからは「黒田様方」「黒田氏

御内のやうに敬綯を附ける。

葉書の認め方と扱ひ方

葉書は何ういふ場合に使ふか

正式の場合、世見を憚るたより、目上への挨拶には葉書は用ひぬ。急ぎの用、簡単な用、目下へのたより、或は正式の場合でも、年賀状、暑中見舞、死亡通知、會葬御礼等の如く、半は事務的のものは葉書でも失礼ではない。結婚披露の招待は金縁用紙を封書にするが結婚通知は葉書でもよい。香奠返しの挨拶も封書に限つたものであるが、たまには葉書を見受ける。何かの礼状その他色々返事も、多忙の時や疲氣の場合は之の事を断つて取敢へず葉書で挨拶しておくがよい。

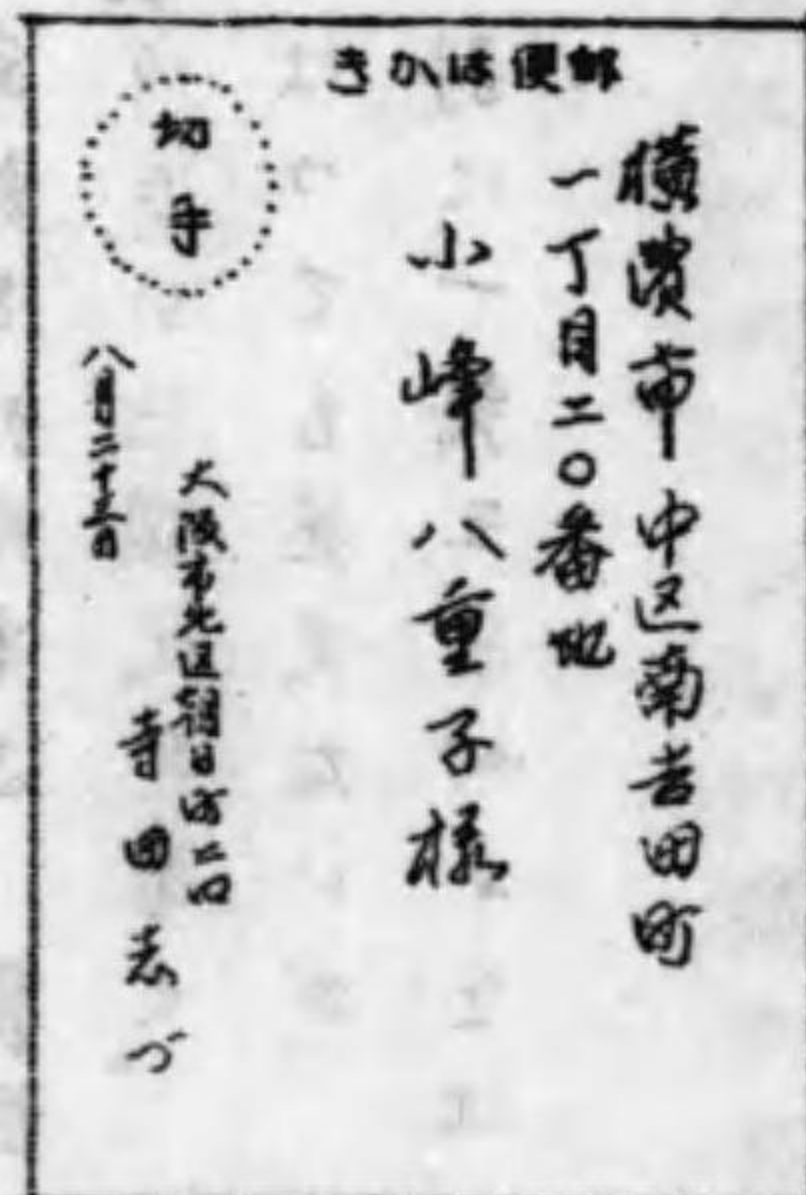
葉書の表の認め方

宛名を表面の中央に認め、右肩に住所を一行か二行に書き、府縣名、市

名は宛名より大きく、〇〇様方などは別の行に出す。宛名の脇附に勿論親展とは書けぬし、又「侍史」とか「御許」にも用ひぬ。葉書は略式であるからである。差出人の住所氏名は切手欄の下へ認め、署名は宛名より小さく、住所はそれより更に小さく詳しく、日附は署名の上、切手の下の左手へ書く。葉書の表面に通信文めいたものを書くと罰金を取られる。切手を墨やインキで汚すと無効になるが、新しく一銭五厘の切手をはれば使へる。

葉書の裏の認め方

天地左右に多少のゆとりを残して、ペンなら一行二十字、十四五行位、毛筆なら一行十四五字の十行位に認める。余り細字で書いたり、一度書き終つた行間へ赤字で書いたり、前半はゆつくり後半はきつしりであつたり、最後の行から更に右へ下の端を廻したり、書き損ねたのを墨で黒々と塗つて、其の上へ鉛筆で書いたりするのは不体裁でもあり、



横濱市中区南者田町
一丁目二番地
小峰八重子様

大隈市北區南者田町
一丁目二番地
小峰八重子様

失礼でもある。理由も無いのに横に書いてはならないし、又さかさに書かぬやう注意せねばならぬ。本文の都合で日時を裏に書くこともわる。裏へは一切添付物を禁せられて居るが、契約書、委任状、領收書等に代用する場合には特に収入印紙をはる事が出来る。

繪葉書の認め方と扱ひ方

繪葉書は表面二分の一下を通信文上を宛名署名に使う。通信文を表面に書かぬ時は通はかきと同様宛名と署名に全部を利用する。裏面に通信文を書く時は繪の邪魔にならぬやう、氣のきいた短文を書く。記念スタンプを貰ふために裏面にとんな切手をはつても差支ないが、それは通信文の一部とみなされる故、表面には別に一錢五厘切手をはらねばならぬ。

往復葉書の認め方と扱ひ方

「往信」の方は表裏ともに普通葉書と同様の心得で認めるが、「返信」の表に差出人自ら自分の住所氏名を書いておくのは、印刷の場合には別として相手の氣持を悪くするから止めたがよい。返信用を出さずにそれを他

の普通の通信に使うのは卑し過ぎる

封緘葉書の認め方と扱ひ方

目上の人にはいけないが旅行用か普通の通信には差支ない。開封の時は上下のミシンの刻み目を破るから、書く時はそのミシンの線の内側にせねばならぬ。

郵便物としての手紙の取扱ひ方

特種郵便物の扱ひ方

封書の扱ひ方

通信文を認めた封書は第一種郵便物として、十五グラム又はその端數毎に三錢、普通の書簡箋なら四五枚か五六枚で、封筒とも十五グラムぐらゐになる。十五グラムをちよつと越して居るだけでも、若しそれに三錢しか切手がはつてないと、受取人の方で倍額大錢の罰金をとら

れる。局によつてはさういふ場合、一應差出人に返附して注意して受
れるから、差出人は常に住所氏名を明記しておかねばならぬ。重要な
通信物は十三銭はつて書留にするがよい。その時も高額の切手を數少
くはらぬと、局でも手數がかゝるし、相手にも失礼になる。

開封郵便の扱ひ方

普通は開き封といひ郵便局では「第四種郵便物」といふ。寫眞、原稿、印刷物、
書物、短冊、圖書、商品見本等を入れ、封の一部を切り開いておくか、或は
糊附をせすに紙コリを綴るかすれば、百十グラム又は其の端數毎に二銭で
すむ。若し中へ通信文を書いて入れたら、又は封じたりすると、十五
グラム又はその端數毎に三銭をはるべき第一種郵便物の取扱ひを受け、
而もその傍寫の罰金を受取人又は差出人が取られる。寫眞や原稿は紙
擦がよく、書籍や部厚いものは包んだ紙の一方の小口をあけ、更に細
紐で十文字に縛るとよい。勿論「封」の字は書かぬ。

書留郵便の扱ひ方

郵便局が配達は勿論手紙の中味の紛失しないやう、絶対の責任を持つ

といふ取扱ひ方である。三銭の外に十銭の追加料を要する。局から受
れた領收書は用のすままで保存しておいて、萬一封入の爲替カヘや原稿が
紛失した場合は、その領收書を證據に逓信省に賠償させる事が出来る。
書留は葉書にも利用出来る。

速達郵便の扱ひ方

東京、横浜、京都、名古屋、大阪、神戸、下關、福岡などの大都市では、同一市内及
び近距離の相互間だけこの方法を取扱ふ。封書も葉書も小包も
も、所定の料金以外に更に八銭の切手をはれば、普通配達の時問より早
く先方へ届けて受れる。

航空郵便の扱ひ方

東京、大阪、福岡、高松、松山、大連など定期航空郵便を取扱ふ局では、飛行機
で郵便物を輸送し、到着地に速達郵便制度があれば無料で速達配達を
する。書状は三銭切手の外に尚十五銭余分にはらねばならぬ。

註 書留郵便、速達郵便、航空郵便は各郵便物の表面に赤字で「書留」「速達」「航空郵便」と認める。

電報の扱ひ方

電報は一音信十五字までは三十銭、同一市内なら十五銭、それ以上は五字増す毎に五銭料金が増す。「スグ」キテクダ サイロクロカ「で」五字三十銭であるのに、「スグ コイ」とする必要はない。電報に用ひる文字は片假名四十八字(ジプ)の如く濁りのある字も用ひられ、それらは一文字で二字に計算される故「ツツシンデ」とするより「ツツシミテ」とした方がよい。数字十字、記號六種がある。至急の「ウナ」、時間外の「ララ」、返信料前總の「ナツ」、同文の「ムヨ」のやうな符號は、電文中に計入される故。その場合本文は十三字で止めるがよい。差出人の名は本文の終に断章の記號「」を入れるが、もや〇を入れるかして書く。その時の都合で何れぬ。マとコとエとエ、レとソとシ、スと又、ソとメとソ、フとク、ワとツ、シとミと三、ニと二、ハと八等ははつきり書かぬと、電報係が讀みちがへて打電する心配がある。電報は文法上の假名遣よりも發音通りの假名の方がよい。「オメデタウ」を「オメデトウ」とするやうに。

附^フ記^キについて

通信物の受取人の住所不明の場合は、小紙片を封筒表面の右上部にはり、受取人住所不明に付差出人へ御返送相成度候と記してホストへ入れ、又轉居先が分つて居る場合も同様小紙片をつけて、^{注意}記へ御廻送相成度候とし、その左へ受取人の住所を詳しく書いて封函する。

自他の呼び方一覧表

主体	相手に対して	自分のことを	相手方を呼ぶ	自分方を呼ぶ
父	父上、父上様、御父上、御父上様、お父様、お父さん	父、自分、父さん	御尊父様、御父上様、お父上、父君(御先考、御亡父様)	父、家父、老父、實父、養父、おやぢ(亡父、先考)、老人
母	母上、母上様、御母上、御母上様、お母様、お母さん	母、自分、私、母さん	御母堂様、御母上様、御母上御母君(御先妣、御亡母様)	母、家母、老母、實母、養母、おやぢ(亡母、先妣)、老人
兩親	御両親様、御両親様、御三方様	父母、兩親、兩人	御両親様、御雙親様、御両所様	父母、兩親、老人、老父母
祖父	御祖父(母)様、おぢいさん(父)おはあさん(母)	祖父(母)、ち、は、自分、自分等	御祖父(母)上様、祖父(母)君、御徳居様(父)(御祖考様)	祖父、祖母、祖父母、老人(亡祖父、亡祖母)
伯叔	伯(叔)父、伯(叔)母、伯(叔)父上、伯(叔)母上、伯(叔)父上様、伯(叔)母上様、御伯叔様	伯父、叔父、自分、他母、叔母、私	御伯父(母)上様、御叔父(母)上様	伯(叔)父、伯(叔)母、山等の伯(叔)父、伯(叔)母
父母	伯(叔)父、伯(叔)母、伯(叔)父上、伯(叔)母上、伯(叔)父上様、伯(叔)母上様、御伯叔様	叔母、私	伯(叔)父(母)上様、御叔父(母)上様	伯(叔)父、伯(叔)母、山等の伯(叔)父、伯(叔)母

利り 奴奴 留る 遠を 和わ 加か 與よ 太た 禮れ 曾そ 闘つ 彌ね 奈な 良ら 武む

里里 怒怒 流流 越越 王王 可可 與与 多多 連連 楚楚 川川 彌彌 奈奈 羅羅 舞舞

利り 努努 類類 乎乎 和和 閑閑 餘餘 多々 禮禮 所所 徒徒 念念 那那 良良 無無

李李 怒怒 留留 遠遠 和和 賀賀 余余 堂堂 麗麗 曾曾 都都 年年 奈奈 良良 武武

利り 奴奴 流流 乎乎 和和 加加 與與 多々 禮レ 曾ソ 川ツ 弥木 奈ナ 良ラ 牟ム

字ウ 龍雨 乃の 於お 久く 也や 末ま 計け 己こ 不ふ 衣え 天て 安あ 左さ 幾さ

字字字 井井井 能能能 於於於 久久久 屋屋屋 滿滿滿 希希希 古古古 婦婦婦 江江江 阿阿阿 左左左 起起起

字字 遺遺 乃乃 於於 具具 夜夜 万万 个个 故故 布布 盈盈 天天 愛愛 散散 支支

有有 為為 農農 於於 九九 也也 末末 氣氣 許許 不不 延延 亭亭 安安 任任 幾幾

守ウ 井井 乃乃 於於 久久 也也 末末 个个 己己 不不 江江 天天 阿阿 散散 幾幾

手紙	物品	住地	居所	団体	下役人	主体
仁に	波は	呂ろ	以い			相手に対して
丹丹	者者	路路	以い			自分のごとき
爾尔	盤盤	呂乃	伊伊			相手方のごとき
耳耳	盤盤	樓樓	意意			自分方のごとき
仁二	八八	呂口	伊イ			相手方のごとき
知ら	止と	四ハ	保保			相手方のごとき
知ら	登登	適適	保保			自分方のごとき
遷遷	東東	邊邊	本本			自分方のごとき
地地	登登	弊弊	本本			自分方のごとき
千子	止ト	部ハ	保保			自分方のごとき

假名一覽表